
仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～

ジュンチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド／紅蓮の破壊者

【Nコード】

N5171W

【作者名】

ジュンチェ

【あらすじ】

世界の破壊者と同じ力をもつ男、西門 四季。ライダーや様々な戦士たちの入り乱れる世界でその瞳は何を見る？『全てを破壊し、物語を紡げ！』

序章（前書き）

どうも、作者のジュンチエです…。初の投稿作品となりますがよろしく願います。

序章

何処かの廃墟のなつた街…

何人もの戦士の猛者達が一人の紅き戦士を取り囲んでいた…。

「紅き破壊者、貴様をここで倒す！」

「できるかな？仮面ライダーブレイド？」

戦士達の猛者の一人、青き鎧に身を包んだ仮面ライダーブレイドが威勢よく声を挙げる。スピードのような顔に赤い複眼が特徴だ…。

「ウェイー！！」

「ふん！！」

『FINAL FORM RIDE BLADE』

「ぐっ！？」

自らの武器で斬りかかろうとしたブレイドが巨大な剣『ブレイドブレード』に変形させられてしまう…。

「ブレイド！！」

赤いボディに龍を模した鉄仮面の戦士、仮面ライダー龍騎が救助に向かおうとするが…

『FINAL ATTACK RIDE B , B , BLADE』

「!?!?ぐああアア!?!」

ブレイドブレードの攻撃をまともに受け爆発してしまう。

「!よくも!?!」

宙に浮いていた白装束の女性が自分の杖の先端部を紅き戦士に向ける。

「デスパイン!?!」

桜色のエネルギーが収束させるが…

「ふん!?!」

「きゃあ!」

紅き戦士はブレイドブレードを投げつけ、女性を叩き落とす。

「時空管理局のエース・オブ・エース高町なのはも大したことないな…」

そう呟くとカードを装填する…。

「消える…」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DECADE
BLOOD』

紅き戦士は銃を構えた。そして、銃口にエネルギーが収束されると
真つ赤な砲撃が二人を消し飛ばした。

「な、なのは！？貴様！！」

「てめえ…」

「！！」

金髪の黒い衣装を纏った女性が金色の刃の鎌を構え、黄色のφを描
いたような複眼が特徴の仮面ライダーファイズがアクセルフォーム
に変わり、赤い複眼に白いライン、そして胸の装甲が展開し肩に収
まる。

「いくぞ…」

『clock up』

赤い装甲に青い複眼、そして何より天を指すかのような角が印象的
なライダー、仮面ライダーカブトが攻撃を仕掛ける。

「ソニックフォーム！！」

『start up』

女性とファイズもそれに続き、やがて三者は見えなくなる。

「速さには速さだ…」

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

そして、紅き戦士も見えなくなる…。

そして、数秒後…

「きゃあ！」

「ぐあ！？」

「ちっ！」

攻撃を仕掛けた三人がボロクソになって地面に放り出される。

「終わりだ…」

紅き戦士は何事も無かったように地面に着地するとバックルにカードを装填する。

『FINAL ATTACK RIDE DE DECADE
BLOOD』

「……ぐあアアアアアア！！」「」「」

そして、紅き戦士の体が炎のように光りその場を包みこむと戦士たちの断末魔がこだました…。

序章（後書き）

さて、これからどうしようか...

人物紹介（前書き）

四季「お前らの出番はここまでだ！」

なのは・フェイト「ええ！？」「」

人物紹介

西門 四季（仮面ライダーディケイド・ブラット）

年齢などは謎。長い黒い髪を後ろで纏めている。普段は黒に赤にのライン、背中に金色の鷲のエンブレムのついた革ジャンを着ている。（しかし、世界が変わるたび衣装が変化する）顔立ちもそう悪い訳では無いが女にはまるで縁が無い。趣味は写真を撮ることと絵を描くこと（しかし、人物画のレベルは最悪である）。性格は細かい事は気にしない。

仮面ライダーディケイド・ブラット

身長192センチ

パンチ力4t

キック力8t

別名『紅蓮の破壊者』。ほぼ、ディケイドと同スペックだが、ボディの色がマゼンタではなくワインレッドで複眼はフラットなイエローである。そして、意味があるかは謎だが白いスカーフがついている。昭和ライダー以外なら変身が可能。ライダー系以外の能力なら変身無しで引き出せる。（しかし、彼自身の能力の本質はあくまでも破壊である。）さらに、他のライダーに変身した状態でもある程度、自身の基礎能力は使える。（例としてアタックライド・スラッシュなど…）

ブラック・ディケイドライバー

ディケイド・ブラットの变身ツール。外見はディケイドライバーの白い部分を黒くし、刻まれているエンブレムは金色である。四季曰くかなり悪趣味。

ブラック・ディケイダー

マシンディケイダーのマゼンタの部分をワインレッド、白い部分を黒くしたような外見。四季曰く、嫌いじゃないけど悪趣味。

キルバット

キバット三世に酷似しているが瞳は蒼く、ボディは銀色である。自称『誇り高きキバット族』なのだが綺麗、そして可愛い女性には目が無く例え人妻であろうとあの手この手でスキンシップを試みるが最終的には子供に捕まり哀れな末路をたどることもしばしば…

基本、情報収集・戦闘サポート・マスコットである。
ある秘密があるようだか…

西門 治

年齢は謎。カフェ『スプリング』を経営する老人。白髪を後ろに纏めている。四季たちの活動拠点である『スプリング』はそれぞれの世界の住人が訪れ、意外と繁盛しているようだ。普段は優しいがキレると魑魅魍魎だろうが重火器を用いてお仕置きする危ないジイサン。たまにカウンターでショットガンを磨いていたりするが怒らせなければ問題ない。

人物紹介（後書き）

なのは「いくら何でもあんまりだよ…」

四季「大丈夫、別の作品に出すらしいから。」

フェイト「ホント!？」

四季「主役じゃないけどな!」

フェイト「出番あるだけ良いけど…」

四季「なにになに…（台本を見る）お二人の出番は序盤無いってさ。」

なのは「そんな!」

四季「お前はしばらく登場しないらしい。」

フェイト「ウソ…」

旅人（前書き）

四季「この小説って昔、作者がモバゲーでやってた小説を本にできたんだよな。」

作者「中々、好調に進んでただんだけど強制非公開となりあえなく…」

四季「あらら…」

作者「ちなみに本は士たち（仮面ライダーディケイド）との出逢いの話もあったんだけど都合上カット。」

キルバット『それじゃ、始まるぞ！』

四季「細かいことは気にするな！！！」

旅人

「また、あの夢か…」

とある殺風景の部屋で一人の青年が目を覚ます。長い髪は女性をおもわせるが体型は完全に男である。

「やれやれだぜ…」

青年の名は西門 四季。性格は細かいことは気にしない。それゆえ、面倒に巻き込まれたこともあったが…

（破壊者なんてまっぴらだ…）

四季は寝間着を脱ぎ紅いシャツを着ると金色の鷲のエンブレムが印刷されたジャケットを着る。

「今日もバツチリだ！」

鏡の前に立ち自分のファッションを確認する。そして、ふと脇の棚の上に置いてあった写真を見る。そこには浅黒いミルクタンクを背負った男性の写真と後は若い男女三人と老人が一人映っている写真があった。

（伊達さん元気かな……………夏海ちゃんまたあえるかな…。）

懐かしそくに写真を見る四季。そして、髪をゴムで纏める。

（さて、行きますか…。）

思い出すだけで恐ろしい…。そんな事を思いながら壁に垂れ下がっている鳥の巣箱のオブジェに手を突っ込む。

「オラ！キルバット起きろ！！」

そして、何かをひきづりだすと勢いよく反対側の壁に叩きつける。

『ぐはあ！？』

そのまま壁に叩きつけられた何かはづりおちていく…。

『き、貴様……………』

それはコウモリのものであった。しかし、蒼い目に銀色のボディはけっしてコウモリのそれではない。

彼の名はキルバット。キバット族というのに分類されるのだらしい。

『解るか四季？基本コウモリは基本、夜行性なんだぞ！』

「うるせえ！てめえは夜はエロマンガを見てるだけだろ！！」

『うるさい！自分のコレクションで楽しんで何が悪い！！』

「黙れ変態コウモリ！！」

『変態コウモリだと！？いいか四季！私は誇り高きキバット…』

「おっと手が滑った…」

四季はマッチをキルバットの巢オフジェにマッチを入れる。

火のついた状態で…

『私のコレクションがあああああああ！？』

あっという間にオブジェは丸焼きになり、キルバットのコレクション（エロマンガ等…）も灰になる。

「二人とも良い加減にして外見てきたら？」

治は呆れながら二人（？）に言う。

「そうだな。逝くぞキルバット！」

『あつ待てゴラ！？てか字がおかしい！！』

そして二人は外に出る。そして、二人は外を見た。

大きな風車にどこか懐かしい風景の街。爽やかな風が吹き抜ける…。

『じっは…風都…』

「
という事は

仮面ライダーWの世界…。
」

旅人（後書き）

次回…

本格始動！

第一弾

仮面ライダーWVS武装錬金篇

来訪者（前書き）

四季「さて、WVS武装錬金篇スタート！でも、俺の変身はもう少し先…」

なのは「私も出番ほしいよー！」

フェイト「諦めよう…この小説じゃ無理だよ…。」

なのは（？）「なら、私がレギュラーにさせて貰いましょう。」

なのは・フェイト「！」

来訪者

「くっ…」

少女は荒れ果てた廃墟の広がる場所で目を覚ました。おかっぱ頭にセーラー服のこの少女の名は津村 斗貴子。まだ、高校生だが立派な戦士の一員でもある。

「ここは……………」

そして、ボロボロの服に一帯の荒れ果てた様子…。そして、そこら中に転がっている他の戦士らの骸。

「一体…これは……………」

辺りを見渡しても景色は変わらない。最早、これは闘い…ではなく、戦争の後だ。

「…」

斗貴子は動く人影に気付いた…。それは戦士達の屍を踏みながらこちらに向かってくる。

「…」

警戒する斗貴子。そして、その人影の全体像が見えてくる…。

白いラインが入った血のように紅い鎧。

バーコードのような顔

つり上がった凶悪な炎のような複眼

血がこびりついている黒いスカーフ

右手に、血の滴り落ちる黒い剣が握られている

彼女はすぐさま臨戦体制に入ろうとした

しかし…

『エクストリーム』！！

電子音声がどこから鳴り響くと紅い戦士の後ろに一人の戦士が立っていた…。

右側がメタリックな緑で左側は赤、真ん中はクリスタルを思わせるかのようなラインが入っている。そして、青い複眼は車のライトのように発光しており二本のつのがそれぞれ複眼の脇についている…。

彼の戦士の名は仮面ライダー^{ダブル}Wサイクロン・アクセル・エクストリーム

二人で一人の憎しみの戦士。

「あああああああ！！！」

「！」

それに呼応するように次々と屍の山の中から戦士が立ち上がる。

「うおおおおおおお！！！」

ギューン、ギューン、ギューン、ギューン、ギューン、ギューン

激しい駆動音と共に姿をかえる赤い戦士。その鎧は次第に闇のように真っ黒に染まり金色のラインが入ると刺々しくなり、二又に別れた角も四本になる。そして、赤い複眼も漆黒に染まる。

仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム

優しき心を失った「黒き闇」「凄まじき戦士」。その瞳に映るのは漆黒の闇と倒すべき敵…。

「うおおおおおお！！！」

『プテラ・トリケラ・ティラノ！！プ・ト・ティラノザウルス！！』

「カズキイイイイ！！」

彼女は少年の名を叫んだが彼にその声は届かなかった…。

「……はああああああああ！！」「……」

戦士達は紅き異形に突っ込んでいく…。多勢に無勢だが確実に一人ずつ裁いていく。

「はああああああああ！！」

『エクストリーム・マキシマムドライブ』！！

『スキヤニングチャージ』！！

戦士達は必殺技の体制をとる…。

『FINAL ATTACK RIDE DECADE BLOOD』

紅き戦士の剣にも焔のような光を持った刀身になり、常時より太くなる。こちらにも全力で受けて立つつもりのようだ…。

そして、ほぼ一瞬だったろう…戦士達はぶつかり合いとてつもない爆発を起こし見えなくなった…。

「カズキ、カズキ、カズキイイイイイ！！」

その爆発の中でも少女の虚しい叫びは響いていた…。

「どうしたの斗貴子さん？」

「え？」

斗貴子は横にある自分を心配そうにのぞきこむ顔に驚く…。

「カズキ…？」

「そうだけど…？」

一体どうなっている？

「大丈夫？ 顔色悪いよ。」

自分の目の前にいるのは他ならないカズキ本人であり彼女の愛しい恋人である。

（なら…さっきのは…）

夢だろう。斗貴子是我ながらなんと恐ろしい夢をみてしまったものだと思う。

「すまない…問題ないよ。」

カズキをだきよせる斗貴子。カズキは驚いた顔をするが以外と満更でも無さそうだ…。

「ゴホン、ゴホン」

すると、咳払いが聞こえる。

「お二人さんイチャつくのは構わないがここは車の中だぞ？」

「！」

彼女は気づいていなかった。いや、忘れていた…と言うべきだろう。今、彼女達は軽ワゴン車に乗っており当然、カズキと彼女は高校生なので車の免許など持っていない。となると車を運転する第三者がいるわけであり…

「！！」

かくなり恥ずかしいところを見られてしまった訳である。しかも…

「斗貴子さんの寝顔…可愛いかったな…。」

「！？」

自分の彼氏にもかくなり恥ずかしいところを見られてしまったようだ…。

「！、@@@♂○○♀φ@！！」

「落ち着け、斗貴子。」

顔を真っ赤にして暴走する斗貴子を宿める運転手。

「さうて、そろそろつくぞ…」

そして、彼女が落ち着いたところで目的地が見えてくる。

「風都だ…。」

数分後…

「風都キタアアアアアアアアアアアア！！」

ノリノリの少年が一人…。カズキである。

「コラ、騒ぐんじゃない！」

注意する斗貴子だが…

「風都キタアアアアアアアアアアアア！！」

「！？」

運転手の男も同じように叫ぶ。いい年の親父なので周囲からは勿論、かなりいたゞい目で見られる。

「ブラボー！一緒にやろう！」

「ああ、いいだろう！！」

「「風都キタア…」」

「いい加減にしろ！」

ボカ、ボカ

とうとうブチ切れ制裁をかます斗貴子。

「ごめんなさい…」

「一応、俺上司なんだけど…」

バカ二人は反省(?)し、土下座する。

「解ればよろしい…」

（あれ？俺、上司だよね…？）

周囲の人は部下に尻に敷かれた上司ほど哀れなモノは無いと思ったり、子供に『見ちゃダメ』と言って去っていく…。

（先が思いやられる…）

頭を悩ませる斗貴子。しかし…

「マツタタヨ…レンキンノセンシ…」

「!」

若い男が突然、絡んできた。しかし、問題はそこではない。

（コイツ…私達の正体を知っている？）

本来なら一般人が知る由も無い事を知っていたのだ。

「サツソク…」

『ホッパ』!!

「シンデクレ…」

来訪者（後書き）

キルバット『嫌だ！！男だけの旅なんて！！』

四季「レギュラー…あと三人？面子増えんだらしいよ？」

キルバット『マジ！？カモーン、プリティガール！！』

四季「女とは一言も言っていないんだが…。」

襲撃のD・二人で一人の仮面ライダー（前書き）

カズキ「着いてそうそうにこんな目に…」

パピヨン（蝶・変態）「気にするな。私の活躍を…」

斗貴子「オマエの出番は無い!!」（↑マジで!?!）

武装錬金のメンバーは本編終了後、1ヶ月後という設定です。

襲撃のD・二人で一人の仮面ライダー

これまでの『仮面ライダーディケイド』紅蓮の破壊者』は

ブレイド「嘘だドンドコドン！」

なのは「頭、冷やそうか……」

オーズ ♪ ラブー・ラブー・ラブー ♪ !!

伊達「あ、後藤ちゃん。おでんある？」

モータロス「俺、参上!!」

「ウホッ
いい男！」

真木「やああああめえええろおおおおお！やああああめえええろおおおおお！」

鳴滝「おのれ、ディケイドオオ！」

フェイト「出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番」

番、出番……」

四季「全然、違うじゃねえか！？好き放題やりやがって！てか、全く関係ない奴混じってんじゃねえか！！」

本編…←

『ホッパー』！！

一行の前に現れた謎の男…

男はUSBメモリらしきものを首筋に差すとメモリは体内に侵入していく。すると、男の体は飛蝗を模した異形『ホッパードーパント』へと姿を変える。

「「「！！！」」」

身構えるカズキ達。周りの人々は突然の異形の出現に悲鳴をあげながら去っていく…。

「レンキンノセンシ…クロス…」

「くそ…」

カズキも自らの力『武装錬金』を使おうとするがしかし、人目のつく場所での使用はマズイし何より最悪の場合、一般人にも被害が出てしまう。

「カズキ、ここは一旦場所を変えよう！」

「わかつ…」

斗貴子は指示を出しカズキもそれに従おうとしたが…

「オソイヨ…」

「！」

既にホッパーDの骨をへし折るほどの威力の飛び蹴りが目の前に近付いていた。

ドコッ！！

「ガバアッ！！」

そのまま蹴り飛ばされ壁にめり込むカズキ。

「チッ…ウケナガシタカ…」

残念そうな声を出すホッパーD。どうやら、思ったほどダメージを与えなかったようだ…。

「マアイイ…ツギハ…」

「オンナダ…」

ダンッ

斗貴子に標的を変えたホッパーD。その大地を蹴った脚が彼女を襲う…

ドコッ

「ゲヘ!？」

ことはなかった。何処からか飛んできた古めかしいデザインの本が異形の頭を直撃。ホッパーDはそのままバランスを崩し地面に落ち

る。

「やれやれ… 弱いレディをいたぶるとは…」

本が飛んできた方向には黒髪の青年が一人。ラフな格好で歳は二十歳前後だろうか…。

「キサマ… ナニモノダ… ！？」

「それはコレを見れば解るんじゃないかな？」

そう言つて青年は男が先程取り出したUSBメモリに似たような緑色のメモリを取り出す。

『サイクロン』！！

青年がメモリのスイッチを押すと電子音声で鳴り響く。すると、青年の腹部に赤い複雑な形をしたベルトが現れる。

「キサマ… マサカ… ！？」

「そう、そのまさかだよ！！」

異形の怯える様に驚く斗貴子ら一行。そして、青年の正体に一気に関心が高まる。

「変身！」

青年がメモリをベルトのスロットに差し込むとメモリはどこかへ消え、青年は倒れる。

「
……」

「
……」

「
……」

「
……」

沈黙する一同……

暫くたつても何も起こらない。

「フザケルナアアア!!」

とうとうホッパーDはシビレを切らし青年に襲いかかる。

「危ない!!」

「シネエエ!!」

カズキの叫び虚しく、異形が飛躍し青年の頭に着地しようとした……
その時……

『サイクロン・ジョーカー』！！

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

電子音声が聞こえたかと思うと凄まじい木枯らしが吹き荒れる。

「ナツ！？」

ホッパーDも流石に空中では身動きが取れず吹き飛ばされる。

「翔子、僕の体危なかったじゃないか……」

「ゴメン、ゴメン、フィリップ。」

すると建物の屋上から人影が一つ降りてくる。風になびくスカーフ。赤い複眼に『W』を模したような角。体の右側はメタリックな緑に左側は黒、そして、腰には先程の青年が着けていた同様の左右のスロットが展開したベルトがついており、右側には青年の緑色のメモリで左側は黒いメモリが刺さっている。その独特のかもしれないオーラは戦士のモノだ…。

「アア…」

のけぞるホッパード。その異形に戦士は左手を向け宣言した……

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

「ヒツィイ…『仮面ライダー』…」

「仮面ライダー？」

怪人の怯えた声の中の単語の中に気になる斗貴子。

「ウオオオオオオオオ！！」

ホッパーDはもはや自棄になったのかWに突っ込んでいく。

「はあっ！」

しかし、それを華麗にかわしラッシュを叩きこむW。

「コノッ！」

ホッパーDは得意の跳躍力で離脱を試みるが…

「『させるか（ないよ）！！』」

『サイクロン・トリガー』！！

Wはドライバーから左側のメモリを入れ換えると左側が青くなり、射撃武装である『トリガーマグナム』が追加される。

「はあっ！！」

ダダダダダダダダダダダダダダダ！！

「グアッ！？」

ホッパーDはWの放つトリガーマグナムの弾丸により叩き落とされる。

「グウツ…！」

それでもなお逃走をはかる。

「逃がさないっていつてんでしょう…！」

『ルナ・メタル』！！

再びドライバーからメモリを入れ換えるW。今度は左右どちらも入れ替える。すると右側が黄色、左側は鉄のような銀色になりトリガーマグナムが消失し背中に棒状の武器『メタルシャフト』が設置される。

「『はあっ…！』」

「グヘツ！？」

Wがメタルシャフトを振るとメタルシャフトは鞭のように伸び、ホッパーDに巻き付く。

「それっ…！」

WはそのままホッパーDを空中に放り投げる。

『ヒート・メタル』！！

今度は右側のメモリを入れ替えるW。同時に右側が赤色に変わる。

『決めるよ!』

『メタル・マキシマムドライブ』!!

Wはドライバーの右側のメモリを抜くとメタルシャフトのスロットに挿入する。

「『W・メタルブランディング!』!」

そして、落下してきたホッパーDに炎を纏ったフルスイングを直撃させる。

「グアアアアアアアアアアアアアア!？」

直撃されたホッパーDはそのまま彼方へ飛んでいく。

「ホームラン…てね…」

Wは怪人の飛んでいった先を手をかざし見つめる。

「すっ…凄い…!」

「かつ…カツコイ…!」

斗貴子は驚愕していた。自分達が手を出しかねていた相手を突然、現れた謎の戦士が完全に圧倒していたからだ。カズキはただ見とれていただけのようだ…

『さてっ…後は…』

Wはカズキ達へ向くと声をかける。

「君達…怪我は無い？」

一瞬だけ警戒したカズキ達だったがどうやら敵ではなさそうなので警戒を解く。

「あっ！はい！！大丈夫です。」

「そう…なら良かった…」

カズキの言葉に安堵の声をだすW…。その時…。

ババババン！！

「『ぐああ！？』」

カズキの言葉に安堵の声をだすW…。その時…。

ババババン！！

「『ぐああ!?!』」

どこからか放たれた雷撃がWを襲う。

「なっ!?!」

ブラボーが雷撃により起きた煙の向こうに異形の影を3つ見た。

2つは緑色の虫を模した異形。蠅螂の怪人、『カマキリヤミー』とその親玉である虫系幹部グリード『ウヴァ』。その体はクワガタ、蠅螂、飛蝗の意匠が見られる。

もう1つは赤い巨体にオリオン座が模してある怪人、『オリオンゾディアーツ』。

「新手だと…!?!」

異形達はゆつくりと距離を詰めてくる…。

「貴様らには恨みは無いが…死んでもおう…。」

ウヴァが身体に雷撃を纏いながら怪人を引き連れ突っ込んでくる。

（ま…マズイ!?!）

「斗貴子、カズキ!?!」

「!?!」

ブラボーはとうとう危険と判断。二人は一瞬で全てを理解し、自らの力を解放しようとする。

「武装錬……」

その時だった…。

『オリヤッ！！』

ガンガンガン！！

「ぐお！？」

「！？」「！？」

何やら得体の知れない小さな飛行物体が異形に突撃し、バランスを崩させる。

ブオオオオオオオオオオオオオオオ！！

ドカツ×3

「ぐは!?!」

今度は一台の黒いバイクが怪人達を弾き飛ばす。

「ストラ〜イクってね。」

そして、バイクから一人の青年が降りてくる。その青年は四季であった…。

「き…貴様は!?!」

「よ〜うウヴァ。また『コアメダル』獲りたいか?」

四季は懷に手をつ突つ込むと黒がメインに金色の装飾、何より赤い寶石らしきモノが目惹く『ブラックデイクイドライバー』を取りだし腹にあてる。すると、バックルからベルトが伸び、四季に巻き付く。

「いくぜ…!」

右手で一枚のカードを持ち、そして、バックルの両サイドのハンドルを展開。

「変身!?!」

右腕を顔の前でもってくるようなポーズを取るとカードをバツクルに装填する。

『KAMEN RIDE...』

『DECADE BLOOD!!』

紅きRの実力・その力は破壊（前書き）

カウント・ザ・カード!!

現在、四季の使えないカードは…

クウガ〜オーズまでの平成主役ライダー

カブトの世界のライダー

アクセル

ギルス

ダークライダーの方々

オーデイン

四季「これ使えないのきついぞ。」

紅きRの実力・その力は破壊

『KAMEN RIDE …』

『DECADE BLOOD』!!

ブラックデイクイドライバーにカードを装填した四季は足元から黒い装甲に包まれた黄色の複眼がついた鎧が精製される。そして、空から七枚の深紅の板が飛来し、頭に突き刺さる。すると、装甲の一部がワインレッドと白に染まる。さらに、その体は炎を纏う…。

「そんなハツタリ…」

「よせ…!」

オリオンゾディアーツがウヴアの静止を聞かず突っ込むが…

「はあ!」

「ふ!」

その前に四季は炎を振り払い、凄まじい衝撃波でオリオンゾディアーツを弾き飛ばす。

『あれは…』

炎を払った四季の姿は変わっていた。ワインレッドと黒に白いライ

ンの十字の入った鎧…。板の刺さってた顔はバーコードのようであり、板だったものは黒い角になっている。そして、真ん中の角の上には紫色の宝石が輝く…。

「いくぜ…。」

白いスカーフをなびかせ、ここに仮面ライダーディケイド・ブラッドが降臨した。

「新しい…仮面ライダー？」

『カードで変身とは…興味深い。』

驚くW。

「オラア…！」

ドカツ…！

オリオンゾディアーツに殴りかかるディケイドB。カマキリヤミーも応援しようとするが自分の腕の鎌では図体のでかいオリオンゾディアーツの援護は難しい。何とか斬りかかった所を軽く蹴りであしらわれる。

「おのれ…」

「邪魔だ…」

『ATTACK RIDE BLAST』

フォーゼが姿を現した。

「宇宙…じゃなかった。風都キター!!」

両方の腕を振り上げ叫ぶDBフォーゼ。雄叫びの内容は多分さっきのアホ二人とは関係無い…。

「舐めるな!」

雄叫びの隙をつき、オリオンゾディアーツは勢いよく突進するが…

『ATTACK RIDE ROCKET』

「!、ぬお!?!」

DBフォーゼは素早くカードを装填、右腕にオレンジ色のロケットモジュールを出現させ、オリオンゾディアーツをかわし地上の怪人三体に滑空するように攻撃を仕掛ける。

「くぐああ!?!」

「次はコレ。」

『FINAL ATTACK RIDE FOF FOUZE』

DBフォーゼはさらに新しいカードを装填。すると左足にドリルモジュールが装備され、ライダーキックの体勢に入る。

「ソイヤアアアアアアアアアア!!!」

Dooooooooon!!

「くああアア!!」

必殺技の直撃を受けオリオンゾディアーツは爆発し、残った怪人二体も銀色のメダルを撒き散らしながら吹き飛ぶ。

「ふう…やれやれ…。」

ディケイドBの姿に戻り地面に着地する四季。その視線は爆発の炎の先に向けられている。

「やった…?」

「まだだ…。」

敵の撃破を予想するカズキだがブラボーは否定。それに呼応するかのように爆発から巨大な影が現れる。

「げ…。」

その影の正体は暴走したカマキリヤミー。外見は超巨大カマキリそのモノだ。流石にディケイドBも呻き声を漏らす。

『ギイイイ!!』

ビュン!!

「わああ!?!」

巨大な鎌を振り回すカマキリヤミー。動きは緩慢だが残念なことに相手の方がリーチでは勝っており迂闊に近づけない。

『四季!!!』

その時、苦戦するディケイドBを援護すべくキルバットが飛来。鎌をかわし、カマキリヤミーの足に噛みつく。

『ギイイイ!?!』

驚いたカマキリヤミーは鎌を振り回し、地面に突き刺さってしまう。

『今だ!!!』

「ナイス!キルバット!!」

その隙にディケイドBはライドブッカーからカードを取り出す。

「後は専門の人に任せる...。」

『KAMEN RIDE...』

「伊達さん...力を借りる...。」

『BIRTH』

『カポーン』！！

バックルに装填するとディケイドBは薄い緑色の球体に包まれ鉄のような装甲が形成、装着されていく。顔はU字のバイザーが特徴のマスクに変化する。

「さて、稼ぎますか。」

ディケイドBは『仮面ライダーバース』の姿と力を借りたDBバースに変身した。

『ギイイイ！！』

「おいさ！」

『ATTACK RIDE KYATAPIRA REG DORIL
ARM SLASH』

カマキリヤミーの攻撃を回避しカードを三枚装填するDBバース。すると両足に機動力を上げるキャタピラレッグ、右腕にドリルアーム、左手にはソードモードに変形したライドブッカーを構える。

「オリアアアアアアアアアア！！」

素早くカマキリヤミーの懐に入りこむとドリルアームで腹を抉り、ライドブッカーで足を切り裂くDBバース。

『ギイイイ!?!』

カマキリヤミーは耐え兼ねて銀色のメダルを撒き散らしながら倒れこんでくるがDBバースはその前に離脱。トドメを刺すべくバツクルに必殺技のカード『ファイナルアタックライドカード』を装填する。

『FINAL ATTACK RIDE B B BIRTH』

『セルバースト』

カード装填後、DBバースの胸に巨大な砲身『ブレストキャノン』が装着されエネルギーが収束。極限までチャージされた途端ブレストキャノンが真つ赤なエネルギーの竜巻のような砲撃を放つ。

『ギ、ギイイイイ!?!』

最早、ろくに動けないカマキリヤミーはただの的でしかなく虚しい断末魔をあげながらメダルを撒き散らし爆発した。

「さて、後1人…?」

残るウヴァを撃破すべく辺りを見渡すDBバースだが既に離脱したようで姿が見えなかった。

「ま、いつか。」

ディケイドBの姿に戻る四季。

「凄い…」

「なんて力だ…」

カズキとブラボーは圧倒的な力に戦慄を覚える。

しかし…

「ああ…」

ただ1人…斗貴子は体を震わせている。

「ああアア!!」

彼女は一瞬、ディケイドBを悪夢の悪魔と重ね合わせると意識が遠退く…。

「おい、お前！」

「斗貴子さん！」

ディケイドBとカズキが何とか受け止めたのと同時に彼女は意識を手放した…。

紅きRの実力・その力は破壊（後書き）

ディケイド・ブラット、カマキリヤミー撃破後…

カラカラ…

転がっていく緑のメダル…

???『このままではすみません…』

不気味な言葉だけ残すと無数の異形の映る銀色のオーロラへ姿を消した…。

Wの正体・それぞれの事情 前編（前書き）

今回短い…

そして、ディケイドおなじみのあの人が現れたようです…。

カズキ「斗貴子さああん！！しっかりしてえええ！！」

Wの正体・それぞれの事情 前編

「ああ…」

斗貴子は再び悪夢の中にいた…。悪魔に立ち向かっていった戦士達は全て倒され、カズキは左手で首を締め上げられていた…。

「…」

「があ…！」

悪魔は無言で彼の首を締め上げ続ける…。カズキの苦しむ声など聞こえないかのように…

「やめる…」

斗貴子は微かな声を絞りだすが悪魔は容赦しない…

スッ…

空いた右手を後ろに引くと…

グシャア

「ぐはあ!!!」

「!!!」

勢いに乗せて彼の胸を貫いた。

「…」

そして、悪魔の手に握られている六角形の物体…。斗貴子はそれを知っていた。

かつて自分が一度死んだ彼に与え、彼を平凡な高校生から運命を大きく狂わせてしまったモノ…。

それは彼の『心臓』の役割を果たしていた…。

それが無くなるのは『死』を意味すること…

ビキッ…

今、それにヒビが入り…

「やめろおおおおおおおおお！！」

ガシャン

彼女の目の前でソレは砕かれた…。

「ああ…」

あまりのショックに地に手をつく斗貴子。
そんな彼女のことなど気にせず悪魔は興味がなくなったかのように
カズキの骸を投げ捨てる。

ズシャ

「ひっ!？」

それは斗貴子の目の前に転がってきた…。

「カズキ、カズキ…」

愛しき少年の名を呼ぶ斗貴子。しかし、胸に大穴があき既に死体となった彼に応える術はなかった…。

「奴は『破壊者』だ。」

「！」

突然、聞こえた声に振り向くとメガネを掛けた中年の男が立っている…。

見かけはボロいコートに帽子を被っている外見はホームレスのようだが彼の纏う空気はあまりにも異様さが感じられる…。

「私の名は『鳴滝』。預言者だ。そして、警告しておこう…。奴を止めるなら今しか無い。」

鳴滝と名乗る男が喋りだした途端、意識が徐々に遠退く斗貴子。

「どうやら時間のようだ…。いずれ君が私と志を共にするならいずれまたあうだろう…。その時まで…」

彼女は鳴滝の話を最後まで言い終わると同時に目を覚ましていくのであった…。

「あっ！！斗貴子さん気がついた？」

斗貴子はソファーに寝かせられており、隣ではカズキが心配そうに付き添っていた…。

「やあ…目覚めたようだね。」

そして、部屋の隅には先ほどの青年が壁に寄りかかり本を読んでいた…。

「自己紹介まだだったね。僕の名前は『フィリップ・ライト』。この『鳴海探偵事務所』で探偵…といっても大したことはしてないけどね…。ま、よろしく。」

「あつ…津村斗貴子です…。どうも…」

斗貴子も失礼ではあつてはいけないと挨拶を返す…。

「フィリップ…あつ！起きたわね。」

今度は髪長い黒いソフト帽を被った女性が出てくる。中々、スタイルが良い…。

「私の名前は『左舷 翔子』。フィリップと同じく探偵をこの事務所で行っているわ。」

ここで斗貴子はある疑問を持つ…

「探偵事務所…？」

なぜ自分とカズキは何故、そんなところにいるのか…？

「あー…覚えてない？あんた気絶して…それを私たちが運んできたんだけど…？」

「斗貴子さん！翔子さんたちは『仮面ライダー』なんだよ！！」

「仮面…ライダー…？」

突然、カズキの言い出した謎の単語に首を傾げる斗貴子。

「本来ならあんまり関係ない時出したくないけど…これを見れば解るかな？」

翔子は懷から黒いUSBメモリらしきモノを取り出しスイッチを押す。

『ジョーカー』！！

「！」

斗貴子はそれと響いた電子音声に聞き覚えがあった…。

「まあ、これで解つ…ちょっ身構えないで！怪人になりやしな^{ドーパント}いから！！」

思わずホッパードーパントを思いだし身構える斗貴子。

「落ち着きたまえ…僕たちは君らの一応、『命の恩人』なんだから…」

「フィリップ、間違つてないから『一応』いら^{ない}ない。」
斗貴子を宥めるフィリップ。翔子は一部訂正をしたが…

「やれやれ…仕方ない。君たちにはこの街（風都）や色々な事情が話す必要がありそうだね…。」

そう言うとフィリップは風都の一般的には知られていない影の事情について語りだした…。

Wの正体・それぞれの事情 前編（後書き）

キルバット『探偵事務所に可愛いマスコットはいますかお姉さん
ああん！！』

翔子「足りてる。」

フアング『クワッ（お呼びじゃなんだよ！！）』

キルバット『orz』

四季「失せろ。変態コウモリ！！」

『プット・ティラアアノ・ヒッサアアアッ！！』

キルバット『！っおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！！！！』

Wの正体・それぞれの事情 後編（前書き）

四季「嫌なフラグがたった気が…」

仕方ないディケイドの宿命だ。

Wの正体・それぞれの事情 後編

風都…

文字通り『風』にちなんだ場所、名物が沢山ある。どこか懐かしい街並みは観光客にも人気であり特に目玉は『風都タワー』と呼ばれる巨大な風車である。

これだけなら観光地…で済むだろう…。

しかし、風都にはもうひとつの一般的には知られていない事情があった…。

ガイアメモリ…

地球の記憶がそれぞれに内包されており、使用者を怪人にかえる悪魔のアイテム。

メモリは『実在するモノ』、『概念』など様々な種類がありどれも危険な代物である。そして、それらは『売人』を通してメモリを欲する人々に『販売』される。

「で、あんたたちを襲ったのはホッパードーパント、『飛蝗の記憶』

のメモリのドーパントね。」

そのままだ…

斗貴子はそう思った…。

この時カズキはあることを疑問に思った。

「はい、質問！」

「はい、何でしょう？」

「話の割にはずいぶんと平和そうなんですが…何故ですか？」

カズキは最もな質問をする。

「ふふ…よくぞ聞いてくれましたわね…。」

翔子は帽子を深く被り顔を少し背ける…。フィリップはこの時、彼女の口元がニヤリとするのを確認した。

「それは私、『仮面ライダー』のお陰よ！」

「『仮面ライダー？』」

二人は首を傾げる。

「翔子、それを言うなら『僕たち』…だろ。ここからは僕が説明しよう…！」

今度は語り手がフィリップに代わり説明を始める。

仮面ライダー

風都の都市伝説として有名なモノの一つ。内容としては影で暴れまわる怪人を何処からか颯爽とバイクで現れる仮面の戦士のこと。怪人を倒すと現れた時のようにどこかへ去ってしまふとのこと…。

実際の仮面ライダーはドーパントと同じく『ガイアメモリ』を使用する戦士の総称、翔子曰く『人々の希望』なのらしい…。それは置いて、ライダーとドーパントの違いは主に2つある。

一つ…ライダーの使うメモリは純正であること。

二つ…ドーパントは直に体にメモリを射し込むのに対しライダーは変身ツールである『ドライバー』を使用する事。これでメモリの中毒作用を中和できる。

「大体、こんなモノだけど解ったかな？」

「じゃあさっき助けてくれたのは…」

「ああ…一応『僕たち』さ。」

そう、先程カズキたちを助けたのは翔子らが変身した仮面ライダー
…『仮面ライダーW^{ダブル}』だったのだ…。

「さてと…それじゃ…」

「君たちについても話してくれないかい？」

「…！」

あわよくば避けてはくれないかと思っていた二人だがやはり、フィ
リップと翔子も探偵、見逃す訳もない…。

「話してもらっわよ…『武装錬金』や『錬金術』について…」

「…何のことでしょう…」

「とぼけても無駄よ。調べはついてるんだから。」

斗貴子も何とか切り抜けようとしたが失敗に終わりついに…

「わかりました…お話します…。」

「斗貴子さん！」

斗貴子を止めようとしたカズキだがその場の空気に押されそのまま黙ってしまふ…。

「こつちも探偵、秘密は守るわ。」

翔子の言葉を一応信じ、斗貴子は自分の知ることについて語りだした…。

「恐らく信じ難いでしょうがこれから言うことは私の知る限りの真実です…。」

『錬金術』と呼ばれる技術があった…。

そして、それによって産み出された存在があった…。

ホムンクルス…

人を喰らう錬金術の化け物。現代の通常の兵器は録に通用せず生命力も高い。人類は『錬金戦団』遙か昔の時代から皮肉にも同じ錬金術の産物である『核鉄^{カクガネ}』を自らの闘争本能で武装化した『武装錬金』で戦ってきた…。

そして、その戦いに進展があつたのはついこの間のこと…

ホムンクルスを率いる蝶野爆爵が倒されたのだ。

しかし、その際『ヴィクター』と呼ばれるイレギュラーの戦士が復活。彼の他の生物の生命力を吸収する力や高い戦闘能力に世界の危機に陥るがヴィクター自身、力を制御しきれていなかったという事実が発覚すると度重なる戦闘を経て和解、そして彼を人間に戻すことに成功。

この際、『錬金戦団』の腐敗が明かされた。

これを機会に『核鉄』とその研究が凍結された訳だが…

「それに従わない奴がいた…という訳ね…。」

「その通りです…。」

いざ止めろと言われても『闘う側』からしてみれば良いかもしれないが『研究する側』からしてみればどうだろう？少なくとも全員「わかりましたやめます」などとは言わないだろう…。

結局、これが内輪揉めに発展しある科学者が強行手段を取った…。
それは…

『核鉄の強奪』

その研究者はあまりの不满に核鉄を無断で持ち出したのである…。

総数… 26個

急遽、大事になる前に確保しようと調査が開始されその研究者がこの『風都』にいと断定された。

そして、派遣されたのがカズキらであったのだ。

「へえゝ似てるわね…『錬金の戦士』と『仮面ライダー』って…」

翔子は思った…。ホムンクルスと同じ錬金術の力で闘う『錬金の戦士』。ドーパントと同じ『ガイアメモリ』の力で倒す『仮面ライダー』…。皮肉じみたモノを感じる…。

「大体そちらの事情は把握できた…。出来ればもうひとつお願いがあるんだが…」

「『武装錬金』を見せてくれないかい？」

「へ？」

予想外の質問をぶつけるフィリップ。彼の目は純粋な子供のように輝いている…。

「ちょっとフィリップ！」

「いいじゃないか。僕らの『W』も見せたじゃないか。」

「『W？』」

「ああ…そう言えば言ってなかったわね。風都の仮面ライダーは1人じゃないわよ。（まあ、Wも2人で1人だけどね。）」

「『ええ！？』」

これには驚くカズキと斗貴子。

そんなこんなで数分後…

とうとうカズキと斗貴子はフィリップの押しに負け、今は事務所の屋上にいる…。ここならば通りほど人目につくことはない。

（どうしてもやらなければダメなのだろうか…。）

乗り気0の斗貴子。

ワクワク…

テンションMax100のフィリップとカズキ…

（やれやれ…）

それを呆れた顔で見る翔子。

「それじゃ…いくよ!」

カズキの合図と共に武装鍊金を展開する。

「武装鍊金！！」

カズキには柄からオレンジ色の帯が伸びた突撃槍『サンライト・ハート+』が握られ、斗貴子には脚のパーツを中心に幾つもの細長いアームが伸び、その先端には刃が装着される。これこそが彼女の武装鍊金『バルキリースカート』だ。

「うおおおおおおおお！！実に興味深い！！」

興奮し、テンションMaxを通り越しもはや『エクストオリイイイイイイイム！！』な状態になるフィリップ。

バルキリースカートが刺さるのを気にせず接近するフィリップ。斗貴子も当たらないようにアームを動かすが何分フィリップの動きが速すぎたため何本か当たってしまう。

「ふふ…私も変身しようかしら…。フィリップ！」

翔子も何故か血が騒いでしまい『Wドライバー』を腰に巻き付ける。すると、フィリップにも同様に『Wドライバー』が出現する。

「了解。」

『サイクロン』！！

『ジョーカー』！！

「「変身！！」」

翔子、フィリップ、それぞれのメモリをWドライバーに挿入。フィリップのメモリは翔子のWドライバーの右側のスロットに転送され、翔子は自分のメモリを左側のスロットへ押し込む。

『サイクロン・ジョーカー』！！

スロットを両サイドへ弾くと木枯らしが発生。翔子の体に細かい欠片が纏まっていき鎧を形成。同時にフィリップは力無く倒れる。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

右手を前に出しお決まりの台詞とポーズをとると再び仮面ライダーWサイクロンジョーカーが降臨した。

「（ピンボーン！）」

カズキが何かを閃いたようだ。

「斗貴子さん俺たちも決めポーズやろう！」

「え？」

戸惑う斗貴子を置いてカズキはサンライト・ハート+を振り回すと
まるで歌舞伎のようにかまえる。

「全力全開!!」

「『え?』」

Wは一瞬固まった。

「あれ?俺何か不味いことしました?」

「いや…知り合いに同じ台詞を言った奴が…」

Wは同じ台詞を言った友人を思い出す。

「そうなんですか…じゃあ次斗貴子さん!」

「え!?わ、私!?!」

斗貴子も仕方なく構え…

「ハラワタをぶちまける!」

「『…』」

と決め台詞を言ってみたもののWには受けが良くなかったのか硬直してしまう…。

そんな阿呆な事をしていると…

「た、大変です!!」

1人の女性が慌てた様子でやってくる。髪は栗色で瞳は蒼い。

「どうしたのシュテル？」

「レ、レヴィと王様が!!」

Wの正体・それぞれの事情 後編（後書き）

「???」へーくよん!」

「???」どうしたのなの?風邪?」

「???」にやはは...誰か噂してるかも...」

怒れるS・星光と雷刃と闇の王（前書き）

四季「見る人みればタイトルで誰出るか解る。」

キルバット『女子！！女子！！女子！！』

怒れるS・星光と雷刃と闇の王

カフェ『スプリング』…

ゴゴゴゴ…

ガクガクガクガク…

今ここには4人の人物がいた…。

文字通り鬼の形相で後ろでダグバビツクリのオーラを出している四季。

それに怯えるシアンに近い青い髪をしたツインテールの女性…。

その隣にはふてぶてしい態度をとっているがかなり焦っているのがバレバレのボブの女性。

その様子を困った様子で見るオーナー、治。

事の始まりは数十分前…

「ま、こんな所か。」

怪人三体との戦闘と一通り風都の探検が終わりカフェ『スプリング』の前までやってきた四季。

「お！繁盛してるね。」

スプリングは店の中が大きな窓から見える。オーナー、治は忙しそうに行ったり来たりしている…。

「さて、俺も手伝う…んん？」

店に向かおうとする四季の目に二人の女性が目に留まる。二人はメニューの中でもちよつと奮発しないと食べれない『アルティメットパフェセット』を食べていた…。

そして、完食しツインテールの女性のほうが財布を見ると徐々に顔が青ざめていく…。

ボブの女性もツインテールの女性を罵倒するような仕草をする二人は話し合いを始めた…。

「これは…まさか…」

四季の思惑が的中したように二人は姿勢を低くし、カウンターを抜ける。オーナーは余りの忙しさに気づく様子も無い。

ガラン、ガラン…

そして二人はドアから出る。

「ふはは！これが『節約』という奴だ！！」

「何か違うと思うけどすごいよ王様！！」

高笑いするボブの女性をツインテールの女性が褒め称える。そして、二人は立ち去ろうとしたが…

「お客様…それは『犯罪』ですよ。」

「「ひっ！？」」

二人は後ろから忍びよっていた四季に気がついていなかった…。

「代金まだ払ってもらってないんですが…」

「「ハハ…ナンノコトデシヨウ…。」」

「じゃあその口元のクリームは何だ？」

「「あつ」「

二人にはアルティメットパフェに使われていたクリームがついていた…。もはやこれは動かぬ証拠となり…

「さて…O H A N A S H I しましょうか…」

「「い、イヤアアアアアアアアアアア！！」」

二人は確保された。この時、四季の後ろにアルティメットクウガ（ブラックアイ）らしきモノが見えたという…。

そして現在に至る。

他の客は余りの居心地の悪さに代金を払ってとっとと退散している。

「えぐっ…許して…」

「ああん！？」

「ひiiiiiiiiiiii!!」

ツインテールの女性は涙目＋上目遣いで許しを乞うが怒れる四季にはそんなモノは通用しない。鬼の睨みで返り討ちにする…。

「この『塵芥』ごときが…!!」

「あ？」

「いえ…何でもありません…。」

ボブの女性も四季には歯が立たない…。悔しそうに罵るのが精一杯だ。

「さうで、レヴィとロードつつたか？何で食い逃げなんかしたのかな？」

「つつ…」

四季は笑顔になった…。目を除いて…。

（あつつ…どうしよう…。このままだと『絶望が僕たちのゴール』だよ…。）

（くそ…シュテル早く助けに来い!!）

ガラン、ガラン…

「「！！」」

二人がそれぞれの思いが届いたのかドアを開けたのは…

「ハア—イ」

ゾクッ

プリズムビッカーを装備したさぞお怒りの翔子だった…。
二人は震え上がり抱き合う。

「あんたら…」

『サイクロンマキシマムドライブ』！！

「金持っていないなら…」

『ヒートマキシマムドライブ』！！

「店に入るなと…」

『ルナマキシマムドライブ』！！

「あれほど…」

『ジョーカーマキシマムドライブ』！！

「言ったでしょうがあああ！！」

『プリズムマキシマムドライブ』！！

「「「ごめんなさアアアアアアアアアい！！」」」

数秒後…

「「「…」」」

プスッ

「これで少しは懲りたかしら。」

翔子のプリズムビツカーに五本のメモリをスロットしたマキシマムを食らい、黒焦げになる二人…。流石の四季も哀れみを覚える…。

一方…

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン…

後から追い付いたシュテルと呼ばれた女性はおーナーに頭を打ち付けながら土下座していた…。おーナーも顔をあげるように言っているが止まらない…。

そこへ…

ガラン、ガラン

「それくらいにしてやったらどうだ？」

「！隼人！！」

青いジャケットに青みがかった髪の長身の男とさらに他のメンバーも入ってくる。

（翔子さん…容赦無い…斗貴子さんみたいだ…）

「カズキ、今凄い失礼なこと考えたろ。」

「うえい！？（何故わかった！？）」

「まあ、ここは一つ穏便に…」

それはカズキと斗貴子と何故か先程とは服装が違い白装束のブラボ―であった…。

「これが『シャイニングパフェ』か。非常に興味深い…！！」

「！！フィリップ、いつの間に！？」

そして、いつからいたのかフィリップが『シャイニングパフェ』を頼張っている。

「！これは…。苺とクリームと強調しつつも互いに潰さない。さらにコーンがさらに違った味わいを魅せる…。まるで『タトバコンボ』や『（番組放送禁止）』のようだ。これは『アルティメットパフェ』のビターチョコと違ってまた良い…。」

そんな美食レポートをするフィリップの横にはもう一つパフェの器が…

「斗貴子さん、『（番組放送禁止）』てなに？」

「バルキリースカート…！」

「ギヤアア!!」

カズキはただ純粹に質問をしただけだが『番組放送禁止』と伏せられる内容だ。それを斗貴子に質問するのは不味かつただろう。

「ブラボーさん、隼人。あんたらどうしてここに？」

翔子はフィリップにタトバ・ダイナミック・3をかけながら隼人に質問する。

「まあ、それは…」

「色々あつて…」

そう言つて二人は先程の出来事について語りだした…。

約一時間前…

「さて…どうしたものか…」

ブラボーはカズキらを一旦鳴海探偵事務所に預け、風都の街を散策していた…。昔、とある任務の時間き込みしているのがブラブラしている…と思われて今のようにな『ブラボー』と呼ばれるようになった事を思い出す…。その任務の事はあまり思い出したくは無いが…。

（まさにこれが『ブラブラ』という奴だな…。）

そんな事を思っていると…

「キヤアアアアアア！！」

「！」

突如、悲鳴が響きわたる。ブラボーは急いで駆けつけてみると…

「なっ！？」

彼の目に飛び込んできたのは…

「俺？」

そこには白装束で長い襟と白いカウボーイの帽子で顔を隠した大男がいたのだから…。いや、ブラボーが驚いたのはそこでは無い。その姿は自らの武装鍊金『シルバースキン』と余りにも…いや、瓜二

つだった…。

「何だかよく解らんが…『武装錬金』!!」

ブラボーはまず自分の偽物を止める事を優先し、自らの武装錬金、『シルバースキン』を発動させる。すると、ブラボーは相手と同じ白装束の格好に白いカウボーイの帽子を被る。

「とっつ!!」

間髪いれず自らの偽物に殴りかかるブラボー。偽物も少したじろくが大したダメージは無さそうだ。

「貴様!何者だ!!」

ブラボーが構えながら問うが偽物は構わずブラボーに攻撃を仕掛ける…。

「くっ…仕方ない。」

偽物の攻撃を掻い潜ると腹部にラッシュを叩きこむブラボー。偽物はぶっ飛ばされ肩膝をつく…。しかし…

「防御力までコピーしてるとは…」

偽物は何事もなかったかのように立ち上がる。元々ブラボーの『シルバースキン』は防御に特化している…。つまり…

「半端な攻撃は通じない…！」

『その通り』

「！」

突如、偽物が喋りだす…。重苦しい嫌な声だ。

『しかし、全部同じだと思っては困るよ…そうだね？ステインガ
ー君？』

『うんうん、そうだね？コーウェン君？』

今度は偽物から新しい声が聞こえる。腹話術だろうか…？

『思い知れ！！我々の力を…！』

「！」

二つの声がダブった瞬間、偽物の両腕から黒い沢山の目玉がついた
触手が放たれる。その先には牙のような刃がギラリと光る。

これはブラボーは危険と判断。素早く飛び退き回避する。

『中々やるね。そうだよね？コーウェン君？』

『そうだね？ステインガー君？』

『だが、これで終わりだ…！』

偽物は左手をブラボーに向けるとそれは爬虫類の頭らしきモノに変形。それは、ブラボーに向かって汚物を吐き飛ばす。

「！なんだ！？」

間一髪で避けるブラボーであつたが汚物は地面に当たる…

「！」

しかし、それは膨らんでいき…

ドオオオオン

「ぐあ！」

爆発を起こした。さらに生臭い悪臭が漂う。

「ちっ…」

ブラボーが体勢を建て直した時には偽物の姿は無かつた…。

「奴は…どこへ…」

辺りを見渡していると…

「見つけたぞ…！」

「…！」

そこに隼人が駆けつけた。

「随分、好き放題やってくれたようだな…」

『アクセセル』…！」

隼人はバイクのハンドルを模したドライバー『アクセルドライバー』を取り出すと腰に巻きつける。そして、赤い『A』とついたガイアメモリ『アクセセルメモリ』を取り出しスイッチを押す。

「ちょっと待つ…」

「変…身…！」

『アクセル』！！

ブラボーの静止も聞かず隼人はアクセルメモリをアクセルドライバーに挿入。ハンドルを回すと車のメーターの表紙らしき円が展開されると彼に深紅の装甲が形成。顔は青いバイザーに『A』をもした銀のラインが付き背中にはバイクのタイヤらしきモノを背負う。こうして隼人は『仮面ライダーアクセル』に変身を遂げた…。

「さあ、振り切るぞ…！」

「やるしかないのか…！」

怒れるS・星光と雷刃と闇の王（後書き）

次回、

ブラボーvsアクセル

仕組まれたB・加速VS防人（前書き）

四季「今回は出番なし。」

キルバット『そんな』

???「つぶつぶ…」

仕組まれたB・加速vs防人

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

アクセルは得意の機動性の高い戦い方を利用しブラボーと肉弾戦を繰り広げていた…。

現状はアクセルが有利でありブラボーは必死にアクセルの繰り出すパンチやキックを受け流している。

「どうした？この程度か？」

（くっ！）

ブラボーとて反撃の機会は何つていれど明らかに自分は偽物と勘違いされているのは間違いないし、何より迂闊に手をだせばこちらの懷を叩かれ兼ねない。

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

「待ってくれ！！話を…」

「なら『メモリブレイク』してからだ！」

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

「くっ！」

苦し紛れに説得を試みるブラボーだがアクセルは拒否。アクセルのラッシュは止まらない。

(なら……)

「仕方ない!!」

ドコッ

「何!？」

ブラボーはアクセルの僅かな隙をつき重いパンチを放つ。もろに受けたアクセルは転倒こそしないものの距離を片手をつく。

「中々やるな…なら…」

アクセルは右手にエンジンブレードを握り再びブラボーへ襲いかかる。

『エンジン・エレクトリック』!!

「!？」

アクセルはエンジンブレードの機械部分を折り展開すると『E』と書かれた『エンジンメモリ』をスロットし元に戻す。すると刀身から雷撃が放たれる。

「はあっ!!」

『エンジン・スチーム』!!

「ちっ!？」

今度は刀身からスチームが放たれブラボーを襲い彼の動きを怯ませる。

「これで終わりだ。」

『アクセルマキシマムドライブ』!!

アクセルはその隙にアクセルドライバーのハンドルをひねり出力をあげる。

「仕方ない!!」

ブラボーも距離をとり構えをとる。

「はあ!!」

「とう!!」

そして、アクセルの赤いライダーキックとブラボーの青いライダーキックがぶつかり合う。

シュタツ

着地する両者…。

「
…」

アクセルの肩から火花が散り…

「
…」

ブラボーの肩からはシルバースキンが焼け焦げていた…。

「やるな…」

「そちらこそ…」

互いに実力を認め合うアクセルとブラボー。
そして、再び戦うべく構えたその時…

「楽しそうですね……」

「「!!」」

突如、二人の間に銀色のオーロラが通り抜け1人の少女が割って入る。

外見は17という所だろうか…紫と青のオッドアイで服装はかつては白かったようだが今は黒くくすんでボロボロで何やら金色やら銀色のチェーンが垂れ下がっている。

「貴様…何者だ!」

アクセルはただの少女では無いと判断し、警戒する。

「私の名前は『アインハルト・ストラトス』、またの名を『霸王』。そして…」

「仮面ライダーサビー…」

少女が名乗り終わると一匹の機械仕掛けの蜂『サビーゼクター』が飛来する。

「変身…。」

『henshin』

サビーゼクターはアインハルトの右腕のブレスレットに装着されるとアインハルトの体にヒビロカネの装甲が形成される…。

『change W A S P』

そして彼女はスズメバチを模したかのようなライダー『仮面ライダー

「サビー・ライダーフォーム」に変身した…。

「カードじゃない！？フィリップの言っていたライダーじゃないのか！」

「『紅蓮の破壊者』の事ですか？彼も私が倒します…。でもまず…」

「あなた方には消えてもらいます。クロックアップ。」

『clock up』

サビーはベルトの右側のスイッチを叩くと姿が消える。

「どこ…グフ！？」

「なっ…がつ！？」

次の瞬間、アクセルとブラボーは中を舞っていた…。さらに、追い討ちをかけるように衝撃が襲う。

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ…

『clock over』

「ぐはあ!？」

「がはあ!！」

電子音声と共に二人の間に降り立つサビー。同時に二人も地面に叩きつけられる。この時、ブラボーはある決心をした…。

「やあ…仮面ライダーさんよ…ここは一つ共同戦線といかないかい？」

「む…?」

ブラボーの提案に暫く考えるアクセル。その間にもサビーはジリジリと近づいてくる…。

「仕方ない…今は貴様を信じる!！」

ボロボロになりながらも立ち上がるアクセルとブラボー…。アクセルはエンジンブレードを構え、ブラボーはそれに並び立つ。

「今さら何しようと思駄です。ライダーステイング。」

『rider stinging』

「霸王・地獄拳!！」

サビーゼクターに電撃を纏わせながら近づくサビー。

『エンジンマキシマムドライブ!!』

アクセルはエンジンブレードにまたエンジンメモリをスロットし必殺技『エーススラッシャー』の構えをとる。

「はああああああ!!」

サビーとアクセルの必殺技がぶつかりあう。しかし、徐々にエンジンブレードの赤い閃光が押されていく…。

「私の…勝ちです。」

「どうかな?」

「!?!」

押されるアクセルの言葉に戸惑うサビー。その瞬間、アクセルの後ろからブラボーが飛び上がり…

「レディを殴るのは好きじゃないが…」

バキッ!!

思いきりサビーを殴り飛ばした…。

威力も先程のアクセルのそれより上でサビーは壁にめり込んでいる…。

「がはあ!!」

これにはサビーは呻き声をあげる。

『必殺…ブラボー・ライダーパンチ…』

ちなみにブラボーは決めポーズを決めてたりする…。

「くう…まだ…」

まだ立ち上がろうとするザビーだが…

「トマホオオオクランサーー!!」

ガンー!!

ザビーの首スレスレに斧が飛来し突き刺さる。それに続き沢山の斧が飛来し彼女を拘束するように壁に刺さる。

「ふん…ガキが…」

斧が飛んできた方向には深紅のライダーがいた…。薄汚れた赤いマントをなびかせ装甲のデザインは騎士のそれを思わせるが至るところが痛んでいる。そして、何より目を惹くのは金色の十字架のような展開したパーツの中に輝く緑色の複眼…。それは小さく禍々しい瞳があった…。

「運が悪かったな。この『流 竜馬』様を通りすぎた時にドンパチやってるとはよ…。」

深紅のライダーはゆっくりとザビーに歩みよる…。それはまさに悪魔が近づいてくるようだ…。

「くっ!」

最早、立ち上がる事さえままならないザビー。しかし…

「オラ！」

ガンー！！

「ぐふう！」

深紅のライダーは容赦なく蹴りを放つ。そして、とうとうザビーの変身は解除されアインハルトの姿に戻ってしまい地面を転がる。

「…」

それでも深紅のライダーは止まらない。ボロボロの彼女の首を片手で締め上げる。

「おい！やめろ！」

「あ？」

ブラボーは止めようと叫ぶが深紅のライダーは機嫌の悪そうに声をだす。

「おいおい、コイツはお前らを襲ったんだぜ？何故情けをかける？それに勝ったのは俺だ。コイツの命は文字通り俺の手の中にある。」

「貴方に慈悲は無いのか！」

「心も身体も脆い奴にかける慈悲は無ええ！！！」

ブラボーの言葉に耳を貸さず彼女の首をへし折ろうとしたその時…

「今、俺の妹を笑ったな？」

バシッ

突如、深紅のライダーの手が弾かれアインハルトが解放され一瞬でその姿が消え深紅のライダーも跳ね飛ばされる。

『clock over』

そして、現れたライダーが2人。バツタを模したライダー『仮面ライダーパンチホッパー』と『仮面ライダーキックホッパー』属に言う地獄兄弟だ。

「に…兄さん…」

「無理して喋るな妹よ。」

今、アインハルトはキックホッパーの腕に抱かれている…。どうやら彼女も彼らの兄弟の妹…のようだ…。

「ふん…また楽しめそうなのが来たぜ…。」

深紅のライダーは立ち上がり仮面の下で凶悪な笑みを浮かべる。そう、戦いを楽しんでいるのだ…。

「おい！その白いの（ブラボー）！四季に伝えろ！！ちょっとこいつらと遊んでくるから美味しい飯用意して待ってるてな！！」

この後、何とかアクセルとブラボーは逃げ切りカフェ『スプリング』に駆けつけたのである…。

仕組まれたB・加速vs防人（後書き）

キルバット『アインちゃんどうしたあああああああ！？』

四季「う、嘘だろ…こっちのアインハルトは地獄兄弟なんだよ！？」

フィリップ「検索したよ！作者がバースさんの活動報告を見て思いつきでやっただらしい。」

四季・キルバット『「思いつきかよ！？」』

Fの能力・検索する真実（前書き）

四季「今回は戦闘なし。」

キルバット『平和が何より。』

Fの能力・検索する真実

カフェ『スプリング』…

「と、まあ、そんな所だ。」

一連の流れを説明した隼人とブラボー。

（深紅のライダー…話を聞く限り竜馬の『ゲットイクサ』だろう…
しかし、何故、地獄兄弟が…？）

物思いにふける四季…。

彼も地獄兄弟とは拳を交えたこともある。しかし、ザビーの少女については知らないし何よりアクセルとブラボーを襲った訳が解らない。

「あの〜僕達帰っていい？」

ここで暫くダウンしていたツインテールの女性が話した。

「ダメだ『キー。ード・クラッシャー』!!」

「僕は『レヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者』という名前だよ!!」

『そうだ四季!!レディの名前はちゃんと呼ぶんだ!』

いつの間にならキルバットがレヴィの豊満な胸に抱かれて鼻の下(？)を伸ばしきっている…。

「ほう…キルバット…お前はそっち側か？」

『背に腹は変えられんならぬ、胸には変えられんならぬ!!ムハハハ!!』

しかし、この決断が彼の命運を分けた…。

『エンジン・スチーム』!!

「『ギヤアあああああ!!?』」

隣にいたボブの女性がエンジンブレードのスチームで二人をグリルした…。

その時、彼女は少々貧相な胸に手を当て目に涙を浮かべていたという…。

「そんな貴方にバストアップグッズ!!」

そんな事をしてるとどこから沸いてきたのか黒いタキシード姿の黒いソフト帽を被った男が現れる…。

「わっ!?!何この人!?!」

この男の登場には四季、キルバット、オーナー以外全員驚く。

「ええ…私は…」

「コイツの名前は商^{あきない} 喜助。太刀の悪い強欲変態商人だ。」

四季が男を簡単に説明する。その途端、全員男と距離をとったのは言うまでも無い。

「ノンノン…私は清く美しい『超時空商協会実働専務』兼、『リア充撲滅ライダー委員会会長』兼、『ロリコンライダー協会会長』の商 喜助でございます。以後、お見知りおきを。」

『因みにコイツの販売するモノは殆どボッタクリだ。』

全く…と言うよりさらに悪化した自己紹介をする喜助。キルバットがさらに重要な項目を追加する。
そして、カズキに目をつけると…

「ハア〜イ！そのボーイ！！」

「え、俺？」

「本来ならぶっ飛ばして殺りたい所だけでも営業時間だからしょうがないですね。」

そう言うときから喜助はハートの形をした栓のピンクの小瓶を取り出す。

「こちらウチの新商品なんですがね、この『ムラムラバースト君』を使えば貴方の彼女をメラメラしてムラムラして『うっひょー！！』てなつて『や・ら・な・い・か・？』てなつて『ハッスル』して童貞卒業間違いなしです。どうですか？今ならお得プライスです。」

「えっ…ええと…」

「「「やめんか！！この悪徳商人！！」」」

とうとう四季、翔子、斗貴子がライダーキックを繰り出し成敗した…。

「まあ…手掛かりも得られたことだし…」

翔子はボロボロのフィリップを叩き起こす。

「フィリップ、検索を始めるわよ！」

「翔子まってくれ！！この店には『サバイブピラフ』という奴が…」

「プトティラ・アルティメット・スリー逝ってみる？」

「それでは検索を始めよう…」

半ば脅す形の翔子…。

「あの…何をしようとしているのですか？」

ブラボーが翔子に質問する。

「ああ、コイツの頭の中は『地球の本棚』と『次元の本棚』、それと『夜天の本棚』って言うのになってて、今してるのは『地球の本棚』からキーワードで情報を絞りだすことね。」

「そう言うこと。」

フィリップは目を瞑ると彼の意識は真っ白で本棚が延々と並ぶ空間にあった…。

「フィリップ、キーワードは2つ。『スティングー』『コーウェン』。
」

「了解。キーワード『スティングー』『コーウェン』。」

すると空間の中の本棚が動き数が減っていく…。

「まだ残っているね。」

「なら、キーワード追加。『核鉄^{かくがね}』、『ガイアメモリ』。」

翔子がキーワードを追加するとさらに本棚が消え一冊の本がフィリップの手元にくる。

「T2コア計画？」

しかし、その本は嚴重に鎖で巻かれ閲覧することは出来ない。辛うじてフィリップは背表紙を読めたが…

「ダメだ翔子！閲覧できない！！」

「それは困ったわね…」

「なら、キーワードを替えてみてはどうでしょう？例えば『協力者』とか…」

「成る程…キーワード変更『協力者』！」

ブラボーの機転により何冊かの閲覧可能な本が残る。

「もう少し絞ってみるか…キーワード『風都』。」

すると一冊の本が手元にくる。

「ビンゴ…『早乙女…賢』？」

フィリップは早速、本を開き閲覧を始め、暫くすると意識を現実に戻す。

「皆…ステインガーとコーウェンとその協力者について分かった。」

そして、フィリップは閲覧した内容について語りだす…。

早乙女 賢

ステインガー、コーウェンと同期であり更には違法研究に彼らと共に携わっている。一時は妻子ができたことに身を引くが妻が亡くなると同時に再び違法研究を再開する。

娘の名前は『ミチル』で現在、大学生だが突如、行方不明になる。

「彼は現在、風都理系大学で教授をしているようだ…。恐らく違法研究の事が明るみに出ていないからだろう…。上手くいけばステインガーとコーウェンを確保できる可能性が高い…」

「よし、なら早速…」

「待ちまかたまえ…君は先程の事を忘れたのかい？」

はやまるカズキを静止するフィリップ。
。

「今、迂闊に動けば返り討ち、最悪の場合取り逃がす場合もある。それに君らを待ち伏せしたした件でも敵がドーパントと何らかの関係がある可能性が高い…。」

そこで、直接、大学に乗り込むグループと外で警戒組に別れることになった。

直接、乗り込むのは翔子と隼人。翔子は聞き込み、隼人はそのまま早乙女を訪ねる。

そして、警戒組にはカズキ、ブラボー、斗貴子、そして、四季が回る事になった。翔子は例のアホ2人の事もあるので遠慮したが、『どうせなら多いほうが良い』と言って参加したのだ。これは翔子らも喜んだが斗貴子は複雑そうな表情をしていた…。

そして、作戦の実行は今日の戦闘のことでもあるので翌日に持ち越された…。

Fの能力・検索する真実（後書き）

次回はオリジナルドーパントが登場。

カフェ『スプリング』メニュー

・サバイブピラフ

火を通しパサツとした黄金色のご飯に絶妙にマッチする特製ピラフ。
さらに、塩コショウが食欲をそそる。

→四季も挑戦するも本人曰く『パサツ』が表現出来ないのだらしい。

疑念のT・黄昏と激突 前編（前書き）

ロード「今回はもう散々だ！」

レヴィ「つかれたよ〜！」

今回は四季の過去に少し触れます。

疑念のT・黄昏と激突 前編

「はあ…」

時は夕刻…

斗貴子は鳴海探偵事務所の窓に寄りかかり外を眺めていた…。夕日を背にした巨大な風車『風都タワー』が非常に絵になる。

カズキは奥で何やらフィリップと話しているようだ…。余計な事を話さなければ良いが…

因みになぜ2人が事務所にいるか、と言うと彼らは元々宿を探す予定だったが翔子は『纏まっていたほうが行動しやすい』と言われブラボーは遠慮したものの四季が例の3人（シュテル、レヴィ、ロード）を連行したためちようと寝床が空いているとのお世話になることになったのだ…。

「はあ…」

だが、彼女は今は溜め息ばかり…

夢の悪魔と酷似した『仮面ライダーディケイド・ブラット』。

悪夢の続き…

メモリの戦士と怪人…

スティングー、コーウエンの狙い…

T2コア計画…

（解らないことばかりだ…）

T2コア計画は恐らく『核鉄』を使った悪事のことだろう…。『核』という字からそれは判断できるが『T2』は何を意味するのか…
翔子に訊ねると『心当たりがある』とのことで彼女は自らの師なる人物と連絡をとると言っていた…。

（今は…考えてもどうしようも無いか…）

斗貴子はそう思うとまた夕日をただ、ぼうつと眺めていた…。

カフェ『スプリング』…

「お客様〜！注文は何になさいますか〜？」

「塵か…お客様、ご、ご注文を…」

「御待たせいたしました。『ハードボイルド・コーヒー』です。」

今、食い逃げ2人とシュテルは働いていた…。

「身体で払えとは言われたけど…」

「くっ…これはこれで屈辱なり…」

数時間前…

「さーて、お前らはどうしてやろうか…。」

あわよくば逃げれると思っていた2人だが四季はそこまで甘くは無かった。

『四季…！こういうのは身体で払って貰うのが一番だぞ…！』

「「ええ！？」」

「「どうぞ煮るなり焼くなり…」」

「「そんな…！」」

キルバットがとんでもない発言をし挙げ句の果てに翔子にまで見捨てられた食い逃げ2人。

「それじゃ…遠慮なく…」

「お、王様…」

「れ、レヴィ…」

「ま、待って下さい!!」

四季の前にシュテルが立ち塞がる。

「シュテル!!」

「おお…!!シュテル、私がお前が助けしてくれると信じていたぞ!!」

希望の光をみた2人。

「確かにこの2人は『バカ』『アホ』『残念』の最悪コンボですが、
これでも私の大事な家族です。どうか2人に手を出すなら私の身で
ご勘弁を…。」

「「シュテル、そんな事思ってたの!?!」」

当前だろ…と思った四季。

「なら…」

「…!!」

「「シュテルウウウウウウウウウウ!!」」

シュテルが覚悟し目をつむった…

「ほい。」

四季は黒い使い古されたエプロンを出した。

「「「え?」」」

困惑する3人。

「きっちり、代金分は働いて貰うぜ。」

「「「…」」」

そして、現在3人は必死に働いているのである。しかも、皆それなりに美人なため噂を聞き付けた客で繁盛している。

「いやゝあの髪短いシュテルって娘、中々良いね。このままうちで働いてもらいたいよ。」

「確かにオーナー、それは同感だ。だが食い逃げ2人、レヴィは良いが…あのロードって奴、表情固いな。」

オーナーと共に調理を担当する四季。オーナーはフライパンで野菜を炒め、四季は食材を切る。

それでも四季は食い逃げ2人への注意は怠らない。
特にもうひとりの食い逃げ犯、『闇の王』ロード・ティアーチェはかなり注意している。

午後6時…

「さて、今日はこれくらいで勘弁してやる。」

「「むぎゅ」」

仕事も一段落ついたので食い逃げ2人を解放する四季。

「おのれ！このままでは済まさん！！」

ボブの髪を逆立てるロード。負け犬の遠吠えという奴だ。しかし…

「王様！！何をしているんですか！？まだ片付けが残ってます！！」

店からシュテルが出てくる。

「いや、良いよ。後、俺やるから。疲れたろ？」

「いえいえ、仕事はきっちり最後までやる物。さあ、行きますよ！」

「や、やめ…シュテル、勘弁してくれえええ！！！！！！！！」

ロードは悲痛な叫びをあげながらシュテルにひきづられていった…。

「あの…これって僕もいった方が良いのかな？」

別に強制された訳ではないがレヴィもついていく。

約一時間後…

「ふっ…」

「…（反応が無いただの屍のようだ…）」

カフェ『スプリング』ではやり遂げた感Maxのシュテルと絶望にゴールしたレヴィとロードの姿があった…。

「いやいや、皆よく働いてくれたね。晩ご飯にしようか。」

オーナーは3人をテーブルに座らせるとオムライスを三人分持つてくる。

「わあーい、オムライスだ！！」

「おお…なんと卵の輝きがまぶしい…」

レヴィとロードは喜んで飛び付こうとする。

「あの…良いんですか？」

シュテルは遠慮しているようだ…。

「いや、遠慮しないでいいよお食べ。」

「そうですが…なら…」

「「頂きます！！」」

ガツガツ…

「あ！こらレヴィ、王様！！行儀が悪いです。」

早速がつつく2人を叱るシュテル。その姿は母のよう…

「へへ…母さんか…」

四季は3人を眺めていると…

『じら、行儀悪いですよ!…!』

ズキン!!

「ぐお!?!」

突如、激しい頭痛が四季を襲う。

「があアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

余りの痛さに頭を抑えのたうち廻る四季…。

「四季!!」

「四季さん!!」

「四季!!」

「塵芥!？」

4人の声が響いたが四季はそのまま意識を手放した…。

カフェ『スプリング』二階、四季の部屋

突然、倒れた四季は今は自室のベッドに寝ている。
その隣にはオーナーとシュテルが座っている…。キルバットも心配
そうに飛び回っている。

「四季さん…どうされたんでしょう…?」

シュテルはオーナーに問う。

「多分…無くした記憶の断片に近づいたのかな…」

「え?」

「四季はね…私の子供では無いんだよ…」

時は12年前…

その日は雨だった…

そして、カフェ『スプリング』の前に1人の少年が倒れていた…。少年はちょうど買い出し帰りのオーナーに保護された…。

「お名前は？」

「…」

「お父さんとお母さんは？」

「…」

「どこから来たの？」

「…」

その少年に話を聞いてみても反応を示さない…まるで…

からっぽだった…

「これは参ったな。」

困ったオーナーはとりあえず温かいココアをだした…すると…

少年は笑顔になった…

そして、後少年は記憶喪失だと判明。録に喋らなかったのはそのためだった…。それに身元も解らないということでオーナーが引き取ることになった…。

引き取る当日

「…」

「お前…名前が無いんだってね？」

「…」

「良ければおじさんがつけても良いかな？」

「…？」

「そうだな…お前の名前は『四季』！西門 四季！！」

「…！」

「四季折々の表情豊かで魅力のある人になるように。てね。」

「四季…」

「そうお前は四季！！」

「四季…！」

この時、少年の西門 四季の時間が動き出したのである…。

「そんな過去が…」

四季の過去に驚くシュテル。

「昔はよくあったんだよ。その度、あんなふうに頭痛に襲われて…
恐らくあの子は拒絶してるのかもしれない…『過去を取り戻す』事を…」

「聞いたことがあります…記憶喪失の人が以前の記憶を取り戻すと無くした後の記憶を無くすと…」

四季の過去は解らないが記憶を失うとなれば相当の事だろう。それに今の記憶を失ってまで思い出したいモノではないだろう…。

「さあ、もうお休み。四季は私が見ておくから。」

オーナーは一旦3人を事務所に帰すことにした…。シュテルは不安そうにしていたが仕方なくレヴィ、ロードを引き連れ帰路についた…。

疑念のT・黄昏と激突 前編（後書き）

帰宅後：

翔子「お前らの寢床は無え！！」

シュテル・レヴィ・ロード

「「「ええ！？」「」」

疑念のT・黄昏と激突 後編（前書き）

四季「良いことがあれば悪いこともある。」

キルバット「ちょっとヤダなそれ。」

疑念のT・黄昏と激突 後編

『くっ………』

『諦める…お前らに未来は無い…』

「お、俺…？」

四季は知らぬ間に何処かの荒野に立っていた…。

目の前にはスカーフが黒く目付きの悪い仮面ライダーディケイド・ブラッド。

そして、赤い珠のついた杖に寄りかかって立ち上がる白い服の女性…。

『貴方に…私達の…未来は渡さない!!』

『俺の未来を奪ったお前らが未来を掴む資格は無い!!』

ディケイドBは黒い紅いラインの入った銃を取り出すとカードを装填する。

『RIRIKAL RIDE…』

『さあ!! 踊れ!!』

『FATE』

すると金髪の黒い服を着た女性が召喚される…。

『な…なのは？』

『フェイトちゃん！？』

フェイトと呼ばれた金髪の女性は白い女性と知り合いのようだ…。

『俺と同じ苦しみを味わいながら死んでいけ…』

『えっ？体が勝手に…？』

フェイトの体はその主の言うことを聞かず金色の刃の鎌を構えると白い女性に斬りかかる。

『や、やめて！？フェイトちゃん！』

『な、なのは逃げて…！』

ザシュ

しかし、フェイトの鎌は女性を捉え真っ赤に染まる。
「！」

『！』

フェイトは鎌を刺した状態のまま硬直する。しかし、女性は血に濡れた手でフェイトの頬を撫でる…。

『フェイトちゃん…これからも…ずっと…友達だよ…』

『FINAL ATTACK RIDE DECADE BLOOD』

ドゴオオン

「！」

2人は組み合いながら紅い閃光に吞まれ消え失せた。

「てんめえええええ！！」

四季もこれには怒り狂いディケイドBへ変身をするが…

「!？」

気がつくとその黒いスカーフのディケイドBの姿は無く、なぜか自分の手にはガンモードに変形したライドブッカーが握られている…。

『お前が殺した…』

『お前が壊した…』

『お前が破壊した…』

何処からか声が響き辺りから異形が立ち上がる…。

「ち、違う!!俺じゃない!!俺じゃないイイイ!!」

「!?!」

四季は目を覚ますとそこが朝で自室であることを知る…。
悪夢のためか汗で服は濡れている。

「そついや…俺…昨日倒れ…!？」

ここで四季は自分の身体に触れる生暖かいモノに気づいた…それは…

「すー…すー…」

「!？」

自らのベッドに突つ伏し眠っているシュテルであつた…。しかも、
朝でお目覚めの『彼の息子』の位置に近い位置に顔がある…。

（やばい…迂闊に動けないぜ!？）

実は四季、一応それなりの歳なのだが今まで女性に縁が無かつた…。
実際、彼は旅で並行世界を転々としているので出逢いがあっても発
展することなど無かつた…。

そんな彼がこんな状況であり、彼の息子は天を指しているのは必然
的だろう…。

（どうする?どうする?俺!?)

ライドブッカーからカードをとりだしどこぞのクウガの中の人ネタ
に走る四季…。相当焦っている。

因みに選択肢は…

・放置

・起こす

・寝る

・襲う↑「却下だ!!」

「仕方ない起こすか。」

『起こす』の選択肢をチョイスする四季。ここでキルバットが『いっけええ!!童貞卒業!!』と書かれたカンペを出してきたがもなく枕で叩き落とした。

「おい、起きろ。」

「起きてます。」

「!?!」

何と彼女はとつくに目を覚ましていた。

「い、いつから起きてた？」

「貴方がカードをいじっていた時です。」

「なぜ寝たふりをしていた？」

「『襲う』を選択したらボコッて警察につきだして慰謝料をたんまり請求できると思ひまして…」

（こ、コイツ…）

この女…油断出来ない。四季はそう思った。

「さて、冗談はさておき気分はいかがですか？」

「ああ、問題無い…」

「なら何故屈んでいるのですか？」

「男の事情だ。」

四季は女性に流石にモッコリとした股間を見せる訳にはいかず『く』の字に身体を曲げている。

（ん？そう言えば…）

四季はシュテルに顔を近づける…。

「な、何でしょう?」

ジー…

かなり顔を近い位置に置く四季…。

(コイツ…似ている?)

彼は夢の中の白い女性を思いだした。彼女はとシュテルと違いワインテルだったが髪を短くするとかなりシュテルと似ている…。

「あ…あの… / /」

「あ!! すまねえ…」

余りにも自らの顔を見つめられ顔を赤らめ目をそらすシュテル…。
四季も思わず謝ってしまう。

「確か… あんた… えつと…」

「シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者です。シュテルとお呼び下さい。」

「んじゃシュテル、お前何でここに…」

「あの… それには深い訳が…」

昨晚…

鳴海探偵事務所前…

「お前らの寢床は無え！」

「『ええ！？』」

カズキらを泊めるとのことです。シュテル、レヴィ、ロードを締め出した翔子。その脇でフィリップがしくしくと泣いており、事務所の奥からは『助けてくれ！』と隼人の悲鳴が聞こえる。

（仕方ない…）

ここで三人＋アルファはカフェ『スプリング』にUターン。そしてシュテルが再度オーナーに土下座。

オーナーはやむなくシュテルが四季に一晚付き添うことを条件に彼女らを泊めたのだ。

（オーナーマジ、良い人）

四季は自分がオーナーに拾われたことを心の底から感謝した。そこへ…

「ヤッホー！朝ですよー！」

ハイテンションのレヴィが入ってきて一瞬固まると…

「失礼しました…」

ドアを閉めた…

「王様！！シュテルが！！シュテルが！！」

「ちょ！？レヴィ違うわよ！！」

シュテルがその後を追う。

「ハッハッハッハッハッ！！」

四季はそれを笑いながら見ていた。

時は過ぎ…

午前10時24分

風都大学近く…

そこにはカズキ、斗貴子、ブラボーと何故かイキイキしている翔子と精根まで吸い付くされたような隼人とすでに全快の四季がいた。

「隼人だっけか？大丈夫か？」

「一応…問題ない…」

四季も氣遣って声をかけるがマトモな反応は帰ってこない…。しかし、翔子は構わず話だす。

「ええ、今回の作戦はスティングァー、コーウエンの確保。まず第一段階としてドクター早乙女から情報を聞き出すこと。なお、早乙女は表だった経歴は無いから今回はスルー。万が一ドーパントとの遭遇、スティングァーらが逃走を図った場合に備えてメンバーを3つに分けます。」

翔子・隼人ペア
大学へ

カズキ・ブラボーペア
見廻り

四季・斗貴子ペア
同じく見廻り

数分後…

「斗貴子さん…大丈夫かな…」

「どうしたカズキ？斗貴子が心配か？」

カズキ・ブラボーペア

見廻りといっても普通に話している。

「んん…そうなんだけど…」

「けど？」

「何か『危ない』っていうか…何か…」

「危ない？斗貴子がか？」

ウンウンと首を振るカズキ。しかし、首を傾ける…。

「何でかな…斗貴子さんの身が危ないっていうより斗貴子さん自体が危ない気がするんだ…。」

「？」

このカズキの不安が後に的中するのはそう遅くは無かった…。

斗貴子・四季ペア

「…」

「…」

こちらはどちらも無言…。

（気まずー！！）

四季は心で叫ぶが誰にも届かない…。

仕方ないので脳内で例のカードネタをする四季。

・そのまま↑現状維持

・話しかける↑話題どうする

結局…

黙ることにした四季。何故なら彼女から殺気を感じとったのだ…。

「四季さん…でしたよね？」

「あ？ああ、そうだけど…」

何か気に触る事をしただろうか？風呂はさっき入ってきたから体臭は無いだろうし特に何もした覚えは…

（まさか…口臭！？）

レディが嫌う男性の原因の典型的な例を思い付く四季。しかし…

「『紅蓮の破壊者』ってご存知ですか？」

「！どうしてそれを？」

「答えて下さい。貴方は『紅蓮の破壊者』なのですか？」

斗貴子は明らかに殺気のレベルを本当に殺意のレベルまであげていく…

「だったら…？」

「貴方をいや、貴様をここで倒す！！」

斗貴子はとうとうバルキリースカートを起動させる。

「これは面倒なことになったな…」

四季もブラックディケイドライバーを取りだし腹に当てるとベルトの形態にする。

「やるしかないか…変身！！」

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

疑念のT・黄昏と激突 後編（後書き）

シュテルら閉めだされた夜

翔子「さ〜てウフフ…」ワキワキ…

隼人「落ち着け翔子！！俺達まだ式もまだ…」↑壁に追い詰められてる

翔子「良いじゃない♪バースさんとこのなのはちゃんはまだ妊娠してるのし…丁度良いじゃない♪」

隼人「丁度良いってなんだ！？うわ…ちょ…」↑服を剥がされる

翔子「さて…絞りだしてもらわよ？」ワキワキ…

隼人「絶望が俺のゴールだああ！！うおおおお！！？」

商「おおっとここから先は大人の世界ですよ。」

激闘するD・現れた黒幕（前書き）

今回はディケイド・ブラットvs斗貴子!!

そしてオリジナルライダー登場！

さらにあの娘がライダーに…！？

激闘するD・現れた黒幕

斗貴子と四季が激突した同時刻…

風都大学…

待合室で隼人は早乙女と会つのを待っていた…。翔子は探偵なので刑事の隼人と一緒とはこれはいかんという訳なので外で聞き込みをしている…。

（早乙女賢…一体どんな男なのだろうか…）

隼人も刑事としてもライダーとしても様々な人間を見てきた…。その中には狂気に満ちた奴や身に覚えのない災難や不幸で犯罪に手を染める者もいた…。

今回、早乙女はどんな奴なのか…隼人は今までの経験上、見た目は普通で誰からでも人当たりの良い人間で恐らく誰しもが彼を犯罪者とは疑わない…そんな人間だろうと予測した…。

しかし…

「貴様か…私と面会したい輩とは…」

待合室に入ってきたのは白衣を着た老人…肌は精気を感じさせず髪と髭は白髪と灰色が混じり伸び放題…
まるで世捨て人だ…

「お時間を取らせて申し訳ありません。風都警察署特殊犯罪科の迅竜隼人です…。」

イメージとは余りにも違いこれには驚く隼人。失礼の無いよう慌て繕う。

「ふん…その刑事が儂に何のようじゃ？」

「単刀直入に申します。…貴方はスティングーとコーウェンに関わっていますね？」

一瞬…早乙女の動きが止まった…。

しばらくして静かに喋りだす…

「貴様…どこでそれを聞いたかは知らんがこれ以上関わらんことだ…他の2人は儂のように甘くは無い…」

「ということは認めるのですね？」

「ふん、逮捕したくば礼状と証拠を揃えてくるのだな…」

そう言うとき早乙女はその場から立ち去る。

隼人も続いて外へ出る…

「あの…」

すると1人の学生に呼び止められた…。

「刑事さんでしたよね？」

「何だ？」

学生はおどおどしながら話し出す…

「さ、早乙女先生は…わ、悪い人じゃないです…ぼ、僕が追試でレポート纏める時も手伝ってくれて…あんな外見ですけど根は優しいんです！ぶっきらぼうな所もあるし、皆嫌がるけど良い人何です…」

「言いたいことはそれだけか？」

「へ？」

隼人は学生に向けて冷たく言い放つ。

「どんな奴だつて根は良い…こんな筈では無い…なんて外見の奴は腐るほどいる。だから俺たち警察は捜査し真実を暴かないといけない…」

「で、でも…」

「確かに人格も大事だ。だがなそれだけでは容疑者にならない理由が無い…」

「そ、そんな…」

「安心しろ…まだ決まった訳じゃない。罪が無ければ疑いは晴れる

さ…」

隼人はそう言うのと学生を残し立ち去っていった…。だが彼は知っている…。早乙女はステインガーに自ら関わっている発言をし、警告してきた…。恐らく間違いない黒だろう…。隼人はやるせない気持ちのまま翔子と合流すべくその場を後にした…。

「…情けない」

学生はただ一人そこに取り残され余りの悔しさに立ち尽くしていた…

そこへ…

「早乙女を助けたのかい？」

「！」

白衣を着た小太りの2人の男が現れた…。一人は浅黒い肌でサングラスをかけておりやけに顔がでかい。もう一人はサングラスの男より背が小さいが肌は青白く人のソレとは思えない…。そしてこちらもやけに顔がでかい。

「こういう時はコレが一番だ。そうだねスティンガー君？」

サングラスの男が青白い男性に話しかける。

「うんうん、そうだねコーウェン君？」

「ええ…？え？」

青白い男性もそれに答える。学生は突然現れた2人に腰を抜かしている。

『アイスエイジ』！！

「ちょっと！？」

サングラスの男は学生の腕をとると懷から『I』と表記されたガイアメモリを取り出すとその腕に突きさした…。

一方、斗貴子・四季ペア

「バルキリースカート!!」

「うお!?!ちよ!?!危な!」

四季の変身したディケイド・ブラットは苦戦を強いられていた…。
何故なら相手は武装を抜けば生身の人間…迂闊に攻撃すれば勢い余
って殺してしまうかもしれない。流石にそれは後々面倒である…。

「答える!!貴様は何なんだ!!」

「だから、ただの仮面ライダーだつてんだろぅが!!」

「ふざけるな!!」

そしてこのやり取りも先程から続いている。

「くそ…こういう時はクウガに…」

ライドブッカーからカードを取り出すディケイドB…。しかし、そのカードの絵は白くピンボケしていた…。

「あ！やべ！？」

「うおおオオオ！！」

仮面の下でミスに気づく表情をする四季。その隙を見逃さずバルキリースカートの刃がディケイドBを襲う。

「ぐああああ！？」

とうとうディケイドBも弾き飛ばされてしまう…。

「まともに答える気が無いならここで失せろ！！」

斗貴子は止めを差すべくバルキリースカートの刃をアームから外し自ら持つ。このほうが威力が高いのだ。

「舐めんじゃねえええ！！」

『ATTACK RIDE SLASH』

ディケイドBも負けじと立ち上がりカードをバックルに装填すると逆手にライドブッカー・ソードモードを持つ。すると刀身が紅く光を帯びる。

「おらあ!!」

バキン!!

「な!?折れ...!?」

常時より素早く威力のあるライドブッカーの剣はバルキリースカー
トを刃ごと粉々にし斗貴子を吹き飛ばす。

「これで終わりだ!!」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DECADE
BLOOD』

完全に頭に血が昇ったディケイドBは必殺技発動カードをバックル
に装填。すると斗貴子目掛けて一直線に紅いバーコード模したよう
な線の円の行列が延びる...

「そいやアアアアアアアア!!」

続いてディケイドBは飛び上がるとライダーキックの体勢をとる。

そして、円を突き抜けると突き抜けた円はディケイドBの右足に纏
われそれが重なりドリルのようになる。これがディケイドBの必殺
技『ディメンション・オブ・ブラット』だ。

「!!」

斗貴子は回避不能と思い目をつむるが...

『霸王・地獄拳!!』

ドカツ!!

「ぐはあ!？」

「!？」

突如、2人の間に黒いオーロラが出現。その中から飛び出した黄色い閃光がディケイドBを叩き落とす。

「兄貴…ここにもいたよライダーが…」

「そうだな弟よ…」

そのオーロラから仮面ライダーザビー、仮面ライダーパンチホッパー、仮面ライダーキックホッパーが現れる。

「くそ…このタイミングで地獄兄弟か…しかも1人増えてやがる…」

ディケイドBは片方の膝をつく。流石に手練れ3人を斗貴子の後に連戦とは非常につらい…

（インビシブル…ダメだ斗貴子が逃げられない。でも今使えるカードじゃ『クロックアップ』に…）

『クロックアップ』

彼ら3人のライダーの最も恐ろしい能力…

凄まじい速さで移動し超高速戦闘を可能にする能力…。動きが速い者に追い付き逆に遅い者には嵐のような攻撃を食らわせることを可能にする恐ろしい力…。

そして今、ディケイドBは彼らのスピードに対抗する手段は無い。

「くっ…」

斗貴子も無事なバルキリースカートの刃を構える。それに気付いたザビー。

「貴方…私を笑ったわね？」

「え？」

「もっと笑いなさいよ!!」

ザビーが斗貴子に襲いかかる。

「やべえ!!」

ディケイドBは斗貴子を援護しようとするが…

「貴様の相手は…」

「俺達だよ」

その前にキックホッパーとパンチホッパーが立ち塞がる。

「ライダーステイング!!」

『Raider stinging』

(まずい…やられる)

斗貴子にザビーの腕が…

バシッ

当たらなかった…。

ザビーの腕は気がつくと何者の手が押さえていた…。そしていつの間にか割って入るかのように銀色のオーロラが出現し、腕もそこから伸びていた…。

「ガキが…甘いんだよ!！」

ガン!!

「うつ!」

腕の主はザビーを蹴り飛ばすとその姿を現す。

紅いマフラー…

黒い髪に凶暴そうな目…

羽織ったロングコートは黒ずんでいる…

そして何より凶暴さを模したような笑みが本人の荒々しさを象徴している…

「りょ…竜馬!！」

「よう…四季!楽しそうじゃねえか…」

ディケイドBは男の名を叫ぶ。竜馬と呼ばれた男はまるで遊びに混じるかのような表情を浮かべる。

「俺も混ぜ…」

カラカラカラ…

「ああん？」

すると竜馬の出てきたオーロラから無色のメダルが転がって彼の足に当たる。

「ああ…ちょっと、ちょっと…」

それを追うようにオレンジ色の髪の少女が現れる。

「遅せえぞ！！ティアナ！！」

「うつさい！！あんたが速すぎるんでしょバカ！！」

「？誰…？」

ティアナと呼ばれた少女は竜馬が拾ったメダルを受けとる。ディケイドBはこちらとは面識は無いようだ…。

「まあ、良いいぐぜティアナ！！」

「あんたが仕切るな！！」

竜馬はメリケンらしき物を右手につけ左手に当てる。同時に彼の顔

に緑色のラインが目元まで延びる。ティアナはカプセルのついたよ
うなベルトを巻き付ける。

「変身!!」

『フイストオン!!』

『カポーン』

「チエエエンジ・フォームワン!!」

竜馬は先日ブラボーとアクセルを助けた深紅のライダー『仮面ライ
ダーゲットイクサ』に変身し雄叫びをあげる。ティアナには装甲が
形成され『仮面ライダーバース』に変身し、バイザーがオレンジ色
に輝く。

「あんたいちいちそれ言わないといけないの？」

「良いだろ、こっちのほうに気が入る。」

バースはゲットイクサに呆れたような声を出す。ゲットイクサは気
にしないようだ。

「いくぜ」

そして第2ラウンドが幕を開けた…

激闘するD・現れた黒幕（後書き）

ティアナがバースの小説もそのうち書く予定です。
まあ、彼女が主役ではありませんが…

ティアナ「私がバースだ!!」

最強のR・策略の影（前書き）

ティアナバースと原作のバースの違い

・バイザーの色

原作↓赤

ティアナ↓オレンジ

最強のR・策略の影

「いくぜ…」

紅いマントをなびかせるゲットイクサ。バースバスターを構えるバース。

「邪魔しないで下さい。私達の狙いは紅蓮の破壊者です。」

「うるせえ！！楽しそうだから混ぜろ！！」

ザビーの警告を無視し突っ込むゲットイクサ。

「ああ！！ちよつと…！！？」

バースも援護射撃の体勢に入る。

「トマホーク！！」

ガンガン！！

「当たれ！！」

バンバンバンバン！！

「ぐああああ！！」

ゲットイクサの取り出した斤の攻撃を受けるザビー。バースは射撃でパンチホッパーの動きを抑える。

「クロックアップ!!」

「オープンゲット!!」

『オー・ブン・ゲット』

キックホッパーがクロックアップを使おうとした瞬間、ゲットイクサはマントや腕の装甲を弾きとばしキックホッパーを怯ます。

「速さには速さだ!」

『ライ・ガー・ドリ・ル』

更にベルトにフェッスルを装填。その姿は赤から青に変わり展開していた顔の十字架も狭まりバイザーに近い形になる。そして複眼も緑から黄色に変化する。

『チエエエンジ・フォームツー!!』

そして左腕に金色のドリルが形成されゲットイクサ・フォーム2に変身する。

「そんな物!クロックアップ!!」

「クロックアップ!!」

『clock up』

劣勢を逆転すべくクロックアップするキックホッパーとザビー。そ

して、2人は超高速の空間、スローモーションの空間に入る。この中ならゲットイクサの動きも鈍い…

「おらあ!!」

ガンガン!!

「何!?!」

筈だった…。

この超高速の空間でも常時と同じように攻撃を繰り返すゲットイクサ。彼もまたフォーム2の特殊能力『超加速』で彼らの動きについてきたのだ…。しかし、竜馬自身の感覚が強化されている訳ではなくあくまでも彼の感覚で攻撃をしている…。

(今、手応えがあつたな…)

仮面の下で凶暴そうな笑みを浮かべる竜馬。子供が見たら絶対泣く。

「オラオラオラ!!」

そして自分の感覚を頼りに攻撃を繰り返すゲットイクサ。

「アイツも相変わらずね。」

『ブレストキャノン』

半ば呆れたようなバース。そしてメダルを取り出しベルトに装填すると胸に巨大な砲身『ブレストキャノン』が装備される。

『clock over』

「ぐああああ!!」

「今だ!! ティアナ!!」

2人をクロックアップから引きずりだすゲットイクサ。

「シュート!!」

『セルバースト』

同時に赤い砲撃がザビー、パンチホッパー、キックホッパーを襲う。

ドオオオン!!

「ぐああああ!!」

3人は纏めて吹き飛ばされザビーは元の少女の姿、アインハルトに戻ってしまふ…。

「な！？アインハルトちゃん！？」

驚いたような声をだすバース。

「くっ！！」

しかし、アインハルトはホッパー達と黒いオーロラの先に消えていった…。

「ティアナ！！あのガキ知り合いか？」

竜馬が変身を解き、ティアナに話かける。

「ええ…でも私の世界じゃ普通に過ごしてたし別の並行世界のアインハルトちゃんかしら…」

こちらに変身を解除するティアナ…。

「はん…地獄兄弟に入るくらいだ…余程のことがあつたんだろう。」

竜馬は適当に推測するとデイケイドBの元へいき、ティアナは斗貴子の元へ行く。

「おい、四季！派手にやられたな！！」

「うるせえ…」

得意げな顔する竜馬に変身を解除し悔しそうな顔をする四季…。

「大丈夫ですか？」

「ああ、済まない。」

ティアナは斗貴子に肩を貸す。

「やれやれ…まず礼を…」

竜馬がここで何かに気づく。

「あーあ…そりゃ使いモンならねえな。」

「え？」

竜馬が指差しをした先は斗貴子の足元…そこには六角形の物体が碎けていた…。これこそ彼女の武器であるバルキリースカートの元でもある『核鉄^{カクガネ}』であった…。ディケイドBの攻撃を受けすぎて壊れてしまったのだろう…。

「そんな…」

斗貴子はその場に座りこんでしまった…。

一方その頃…

『ヒート・トリガー』！！

『エンジン・スチーム』！！

大学の広場でWとアクセルがドーパントとの戦闘を繰り広げていた…。

相手は『アイスエイジ・ドーパント』、氷雪系の能力を使いこなし、刺々しい外見が特徴だ。勿論、氷雪系は高熱に弱いわけであり、

『ぐわああああー！！』

「ちよろい、ちよろい。」

「手応えが無い。」

一方的にライダー達が優勢に戦闘を進めていた…。

その様子を大学の屋上から見る2人の人影…。

「ああ…やっぱりダメだ。そうだね？ステインガー君？」

「うんうん、そうだね？コーウェン君？」

二人は白衣のポケットから黒いガイアメモリを取り出す。しかし、その接続部分は赤い。

『『インベーター』！！』

そしてスイッチを押すとメモリの接続部分や所々から小さな触手と目玉が現れる。

「「見せてやろう我らの力を…！！」」

そのメモリを首に差し込むと2人は黒い異形となり姿を消した…。

「さ〜てグリルにしてあげる。」

Wは物騒なことを言いながらトリガーマグナムに『ヒートメモリ』をスロットしようとする。

『待て翔子！ここは隼人に任せよう。』

「何でよフィリップ？」

『君がヒートトリガーでマキシマムをやると犯人焼き殺すかここいらが焼け野になる。』

「何ですってええええ！？」

フィリップの発言にブチ切れる翔子。

グチャグチャグチュ…

「『！』」

その時アイスエイジDに異変を襲う。

『があアアアアアアアアアアアアア！！』

『アイスエイジ・ビーストモード』！！

生の肉を引き裂いたときののような音と共に身体は刺々しくなり、身体も黒ずんでいく…。更に腕に氷の巨大な爪が生成され胸に爬虫類のような目玉がギョロギョロと覗いている。しかも3つ。

『中々だね。そうだよな？ステインガー君？』

『うんうん、そうだよな？コーウェン君？』

そして異形からは明らかに別の人物の声が聞こえる。

「な、何なのよコイツ…」

『わ、解らないけど…』

「まずそうだな…」

Wとアクセルは警戒する。

『それでも食らえ！』

アイスエイジDは爪を向けるとライダー達に向かい射出。

『おっと！！？』

「ぬお!?!」

紙一重でそれをかわすとアクセルは懷に入りエンジンブレードできりつける。

ガン!!

『その程度か?!』

ビキビキ…

「なっ!?!」

しかし刃は通らず凍りはじめた…。

「隼人!」

『ヒート・マキシマムドライブ』!!

Wはアクセルを救出すべく『ヒートメモリ』をトリガーマグナムにスロットし巨大な火の玉を放つ。

『あち!?!』

「くっ!?!」

掠めこそはしたものの空に向かう火の玉。それでも解凍には十分でアクセルは距離をとることに成功する。

「やってくれたな！！威力が足りないなら最大の力で振り切るまでだ！！」

『エンジンマキシマムドライブ』！！

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリをスロットし、

『アクセルマキシマムドライブ』！！

さらにアクセルドライバーのハンドルを捻り『ツインマキシマム』を発動させる。

「はああああああ！！」

ズカン！！

『ぐわああああ！！』

凄まじい光を纏ったエンジンブレードを振り抜くとアイスエイジDは凄まじい爆発を起こした…。

『結構痛かったねステインガー君？』

『そうだね？コーウェン君？』

「何！？」

それでもアイスエイジDは健在だった…。

しかし:

[illegible]

ガン！！

「ぐわあああ！！」

そこへサンライトイエローの閃光が突っ込みアイスエイジDを弾き飛ばす。

「大丈夫ですか？」

それはサンライトハート+を構えたカズキであつた。

「やれやれ……今度はこっちが助けられたわね……」

これで貸し借りは無しだね。

安堵の声を出すW。アイスエイジDもノックアウトしたようだ…。

「まあこれで一件落…」

『エターナルマキシマムドライブ』!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5171w/>

仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～

2011年11月20日21時36分発行